

令和 6 年度 研究紀要 第 51 集

生涯にわたる豊かな学びを目指した授業づくり 児童生徒の夢や願いを基点とした「わかはとシステム」の活用

巻 頭 言.....校長 前原 和明

第 1 章 研究の概要.....1

第 2 章 授業づくりの実際

1 小学部 授業づくりの実際6

2 中学部 授業づくりの実際16

3 高等部 授業づくりの実際28

第 3 章 アンケート調査の結果

1 障害福祉サービス事業所アンケートの結果39

2 保護者アンケートの結果43

3 アンケート調査結果の考察46

第 4 章 研究のまとめ

1 成果と今後に向けて.....47

2 公開研究協議会の記録.....50

あ と が き.....副校長 宮野 俊実

研 究 同 人

研究紀要発刊にあたって

校長 前原和明

附属特別支援学校では、昨年度より、「生涯にわたる豊かな学びを目指した授業づくり」という研究を行ってきました。この2年間の研究を経て、研究成果を示すことができたことをうれしく思っております。

この研究では、「生涯学習」という言葉を中核において、児童生徒の新たな教育実践を提案しています。このテーマ設定の背景には、児童生徒の社会参加に向けて、職業的なスキルの獲得だけでなく、生涯に渡るキャリア発達の追及をしていくための力の獲得、児童生徒の主体性の育成など、さらには、現行の教育実践の改善という挑戦的な思いがあります。

令和6年度の研究では、共同研究者として、秋田県総合教育センター 進藤拓歩先生、島津憲司先生、秋田県立支援学校天王みどり学園 小野直子先生、秋田大学教育文化学部 鈴木徹先生、能田昴先生、藤井慶博先生など多くの先生方にお世話になりました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。研究テーマを考えると、夏のセミナーなどを通じて、本校卒業生、在校生、保護者から得た意見が本研究を大きく推進させました。本当に貴重な御意見をありがとうございました。

最後に、本年度の研究紀要では、本校が推進してきた「生涯学習力」がどのようなものであり、この実践をするために必要な視点を、本校がこれまで培ってきた「私の応援計画」、「わかはとモデル」、「わかはとシステム」といった言葉で解説しています。最終年度である今年度は、それだけでなく、読者となる現場の先生方が、実際の教育現場で活用するための「私の応援計画」作成ガイドの改訂に力を割いてきました。『私の応援計画』の重要性は理解したが、どのように取り組めばいいのか?』といった疑問の声に応えるようなものとなっておりますので、ぜひ御覧ください。本研究紀要を読んでもらうことで、これまでの教育実践を改善する視点を得ることができるのではないかと信じております。

昨年度も書きましたが、研究の最終到達点は、目の前で教育を受けている児童生徒の成長発達です。この本研究紀要を通じて、多くの方々と児童生徒の教育の実践知を共有し、更なる実践が広がっていくことを強く願っております。

第Ⅰ章 研究の概要





生涯にわたる豊かな学びを目指した授業づくり

～児童生徒の夢や願いを基点とした「わかはとシステム」の活用～（2年次／2年計画）

研究の概要

1 研究主題設定の理由

（１）本校の研究の歩み

本校では、令和元年度から「生涯学習力」に焦点を当てた研究を進めてきた（図１）。令和元年度、令和２年度の２年間は、「生涯学習力」を「主体的にヒト・モノ・コトに関わり生涯にわたって学びに向かい成長しようとする力」と定義し、「生涯学習力」を高める教育課程の編成に向けて取り組んだ。令和３

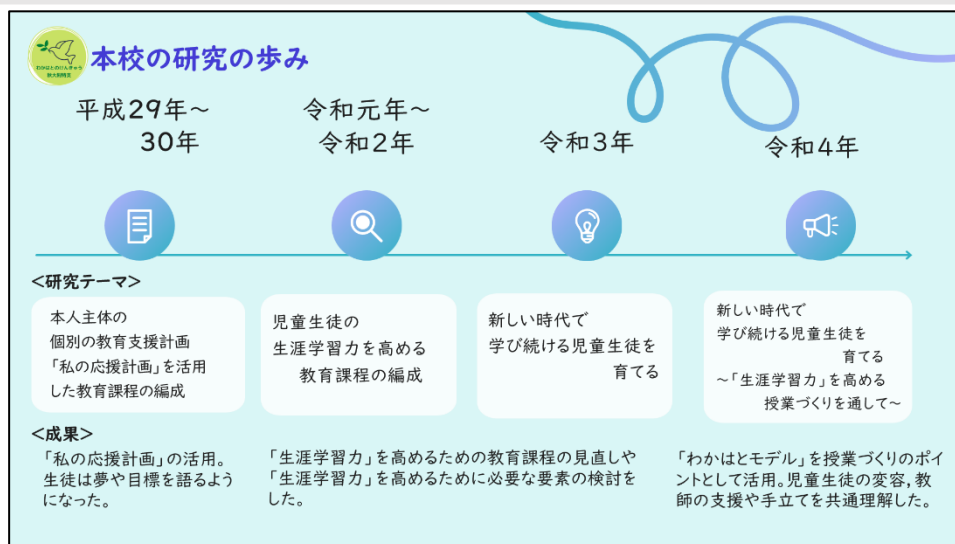


図１ 本校の研究の歩み

年度からは、児童生徒の「生涯学習力」を高めるための基盤整備について３つのワーキンググループを立ち上げ、「生涯学習力」を高めるために必要な要素や学習内容を検討した。さらに令和４年度は、「生涯学習力」を高めるための授業実践に焦点を当てて取り組み、授業づくりの視点として「生涯学習力」を高めるための要素となる「わかはとモデル」（図２）を作成した。この「わかはとモデル」を活用して学部間のつながりを考慮した単元構想や指導内容を検討したり、児童生徒の「生涯学習力」が高まった姿や変容を見取ったりした。特に、学部を越えて意見交換を行う「つながりミーティング」において「わかはとモデル」を活用したことで、職員は各学部の取組や児童生徒の成長過程について理解を深めることができた。

本校の特徴的な取組である「私の応援計画」（秋田大学附属特別支援学校研究紀要. 2018）は、その作成を通して児童生徒自身が学びの主体であることを自覚できるよう、児童生徒が自分の意思を表現できる環境を構築し、児童生徒たちの「思い」「願い」「夢」を大切にしたい個別的教育支援計画である。平成２９年度から３０年度までの２カ年、「本人主体の個別的教育支援計画（私の応援計画）を活用した教育課程の編成」を研究主題として研究に取り組んでいる（図１）。令和４年度は、この「私の応援計画」を基盤としながら、「わかはとモデル」を活用して「生涯学習力」を高める授業づくりを行ってきた。児童生徒たちの「思い」や「願い」、「夢」から生涯にわたって学び続ける姿をイメージしつつ、「わかはと

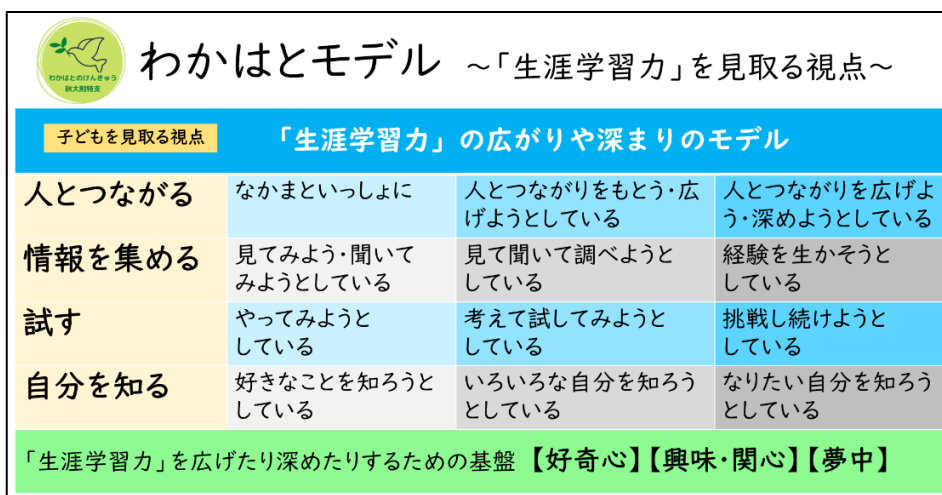


図２ わかはとモデル（現行版）

モデル」を活用して児童生徒の「今ここにある姿」を見取ってきたことで、職員は児童生徒の「分かった」「できた」といった学びの結果だけではなく、授業の中で「児童生徒がどのように学んだか」「児童生徒が学びの結果から何を得たか」という点に目を向けられるようになった。そして、児童生徒の学びが学校・家庭・地域の中でどう役立っているのか、どうつながっていくのかを理解することが、「生涯学習力」を高める授業づくりを進める上で重要であると認識した。一方で、毎年の職員の異動により転入職員に「私の応援計画」の目的や意図、その意義の押さえまでは十分に引き継がれずに、活用することのみが継続している現状もみられる。

（２）令和５年度の成果（○）と課題（△）：全体

研究１年次は、「生涯学習力」を高めるための要素として作成した「わかはとモデル」を『生涯学習力』を見取る視点」として児童生徒の実態把握や生涯学習力の高まりを見取る際に活用した。また、これまでの研究の成果をつなげる「わかはとシステム」の構築を目指した。この「わかはとシステム」は、常に児童生徒の夢や願いを基点とし、子どもと授業をつなげ、「生涯学習力」の育成を目指すとともに、APDCAサイクル（PDCAサイクルにA：アセスメントを含めたもの）で検証し、改善していくものである（図３）。また、令和５年度の成果と課題を以下の５点で示した。

①「わかはとモデル」の分析と改善

○授業研究会やつながりミーティングの際に、「わかはとモデル」を活用することで、児童生徒の生涯学習力の高まりを学校や家庭、地域の視点で見取り、職員間で分析することができた。また、「わかはとモデル」の４つの視点を職員が様々な場面で意識できるようになってきた。

△分析と改善を積み重ねていく中で「わかはとモデル」に当てはまらない児童生徒の姿についてもみえてきた。また、育成を目指す資質・能力との関係性がみえないことが課題として挙げられた。

②「私の応援計画」への「わかはとモデル」の活用

○「私の応援計画」作成時と評価時の児童生徒との面談を行う際、職員側が「わかはとモデル」の視点を生かした対話を大切にすることができるようになってきた。

△保護者面談の際に、「わかはとモデル」の視点に関わる児童生徒の成長や変容を伝えることが不十分であった。また、児童生徒本人が振り返った「私の応援計画」を次年度以降に引き継ぎ、本人が活用できる工夫が必要であると感じた。

③校内外のつながり、卒業後のつながりの検証

○学部間や学部を越えたつながりを全校縦割りで検討や検証する「つながりミーティング」は、他学部の視点を授業改善に生かしたり、授業以外の様子から児童生徒の変容を見取ったりする機会として有効であった。また、そのことで多面的かつ複数の目による実態把握と評価が充実した。

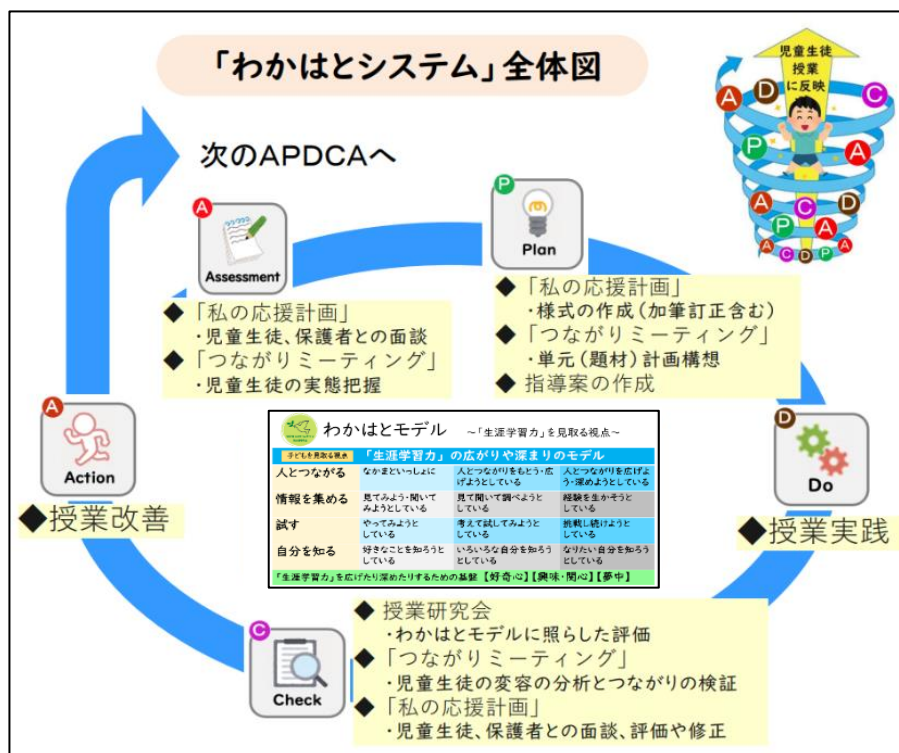


図３ わかはとシステム全体図

△「つながりミーティング」の実施時期や回数は、「わかはとシステム」の構築に向けて検討が必要であった。

○「障害のある方の豊かな学び」について卒業生とその保護者にアンケート調査を行い、保護者の思いや願い、卒業生の生涯学習の現状を知ることができた(秋田大学附属特別支援学校研究紀要. 2024)。

△「わかはとモデル」の生涯学習力を見取る4つの視点と基盤となる3つの視点が卒業後にどのように生かされ、広がっているのかを調査、分析、検証する必要がある。

④家庭や地域との連携

○PTAの際に保護者に研究の説明をしたり、生涯学習に関する保護者アンケートを実施したりすることで、本校の研究の理解を促し、保護者と同じ方向で児童生徒の学びを考えることにつながった。

△地域の活用は、各学部で授業実践の中で行われているが、生涯学習力を高めるための視点からも地域展開によって得られる学びを必要なこととして共通理解することや、地域への発信や連携についてはまだ十分な状況とは言えないため、今後更に進めていく必要があると感じた。

○保護者に対して生涯にわたる豊かな学びに関するアンケート調査を実施し、その調査結果から保護者は生涯にわたって学び続けるためには、学ぶ機会や本人をサポートする周りの環境が最も大切であると考えていた。また、本人の興味関心や好奇心などのチャレンジ精神が必要であると挙げていた(秋田大学附属特別支援学校研究紀要. 2024)。

△この調査結果と「わかはとモデル」の生涯学習力を見取る4つの視点と基盤となる3つの視点がどのように関係しているのかを分析、検証する必要がある。

⑤「エピソードシート」の活用

○単元終了ごとに事例対象の児童生徒のエピソードを基に「わかはとモデル」の視点での見取りを行うことで、以前よりも児童生徒の意図や思い、成長と学びの広がりを分析できるようになってきた。

△児童生徒の夢や願いに立ち返って評価する視点が不十分だった。また、エピソードを記録し、分析することに時間的な負担があった。今後更にエピソードシートを改善し、より使いやすく持続可能な評価のツールにしていく必要がある。

(3) 令和5年度の各学部の成果(○)と課題(△)

児童生徒の夢や願いを基点とした授業づくり

【小学部】○学びに向かう児童の姿を引き出す授業の実現

△「私の応援計画」と「わかはとモデル」をつなぐ手立ての検討

【中学部】○実態把握から評価・改善の流れによる生涯学習力の高まりの実感

△地域との関わりにより得られる学びの効果の検証

【高等部】○生徒の思いや願いを尊重した授業の展開

△「私の応援計画」と「わかはとモデル」の結びつけ方

「わかはとモデル」を活用した児童生徒の見取り

【小学部】○児童の内面に着目した見取り方の広がり

△子どもの夢や願いに立ち返る評価の在り方

【中学部】○「人とつながる」等の観点の広がりによる他の観点への作用効果

△「わかはとモデル」の観点に分類できない出来事や内面の動きの見取り

【高等部】○「わかはとモデル」の観点による生徒の具体的な姿の見取りの充実

△卒業生へのアンケート結果の分析、検討

以上のことから、これまでの研究成果を基に、卒業後も学び続けようとしたり、自分から学ぼうとしたりする意欲を育み、「生涯にわたる豊かな学びを目指した授業づくり」を通して児童生徒の「生涯学習力」の広がりや深まりの検証をしたいと思い、本主題を設定した。

(4) 令和6年度の取組の方向性

令和5年度の研究を通して、「わかはとシステム」の構築が進み、全体像がみえてきた。今後、この「わかはとシステム」を学校の教育課程の中に位置付け、今後も持続可能な仕組みとして確立していく必要があると考える。そこで、今年度の2年次研究の副題を「児童生徒の夢や願いを基点とした『わかはとシステム』の活用」とし、この仕組みが5年後、10年後も続くように、研究を推進していく。今年度の研究推進に向けて、以下の方策を考えた(秋田大学附属特別支援学校研究紀要. 2024)。

- ・「わかはとモデル」と育成を目指す資質・能力との関連性の検討
- ・児童生徒の評価、学びの履歴の可視化
- ・保護者、地域との更なる連携
- ・「わかはとシステム」を中核とした教育課程の編成

2 研究の目的

児童生徒の夢や願いを基点とし、子どもと授業をつなげ、「生涯学習力」の育成を目指す「わかはとシステム」を活用し、生涯にわたる豊かな学びを目指した授業づくりを推進する。また、このシステムを本校の教育課程に位置付け、児童生徒の「生涯学習力」の広がりや深まりを検証する。

3 研究の内容と方法

上記の目的を達成するために、以下の内容と方法を設定した。

(1) 「わかはとシステム」の活用と改善

- ・「わかはとシステム」を今後も継続していくために、研究部と各分掌部が関連を図りながら検討し、改善していく機会(「わかはとシステム運営委員会」)を設置する。主に、「私の応援計画」の改訂版の検討、各種教育計画とのつながりの検証、「つながりミーティング」の内容等の検証を行う。
- ・児童生徒の「生涯学習力」の高まりを継続的に検証できるように、「エピソードシート」の様式を情報文化部と連携しながら検討し、「生涯学習力」がどのように広がっているかを分析し、検証する。
- ・児童生徒の夢や願い、「わかはとモデル」の視点とのつながりがみえる学習指導案の様式を情報文化部と連携しながら検討し、活用する。

(2) 「私の応援計画」のブラッシュアップ

- ・「わかはとモデル」の視点を入れ込んだ「私の応援計画」作成ガイドの改訂版を検討する。
- ・「私の応援計画」をキャリア・パスポートとして活用し、児童生徒本人による評価や、学びの履歴の可視化を進める。
- ・活用できる「個別の移行支援計画」を目指して、卒業生版の「私の応援計画」の作成と活用に向けた方策を検討する(「私の応援計画」社会人用の検討)。

(3) 「生涯にわたる豊かな学び」の検証(アンケート調査の分析と検証)

- ・令和5年度に実施したアンケート調査(在校生の保護者、卒業生、卒業生の保護者対象)を「わかはとモデル」の視点で更に分析し、生涯学習力の育成に向けた教育効果等を検証する。
- ・進路先である事業所や障害福祉サービス事業所などから、障害のある方の豊かな生活や学びの在り方、課題等についてアンケート調査を行い、分析する。
- ・セミナー(シンポジウム、生涯学習についての取組紹介)や公開研究協議会を開催する中で、卒業生や在校生にとって「生涯にわたって豊かな学びを続けるために必要なこと」についての手掛かりを探る。

4 わかはとシステムの関連図

「わかはとシステム」は、常に児童生徒の夢や願いを基点とし、子どもと授業をつなげ、「生涯学習力」の育成を目指すとともに、APDCAサイクルで検証し、改善していくものである。以下は、「わかはとシステム」の関連図を示したものである。

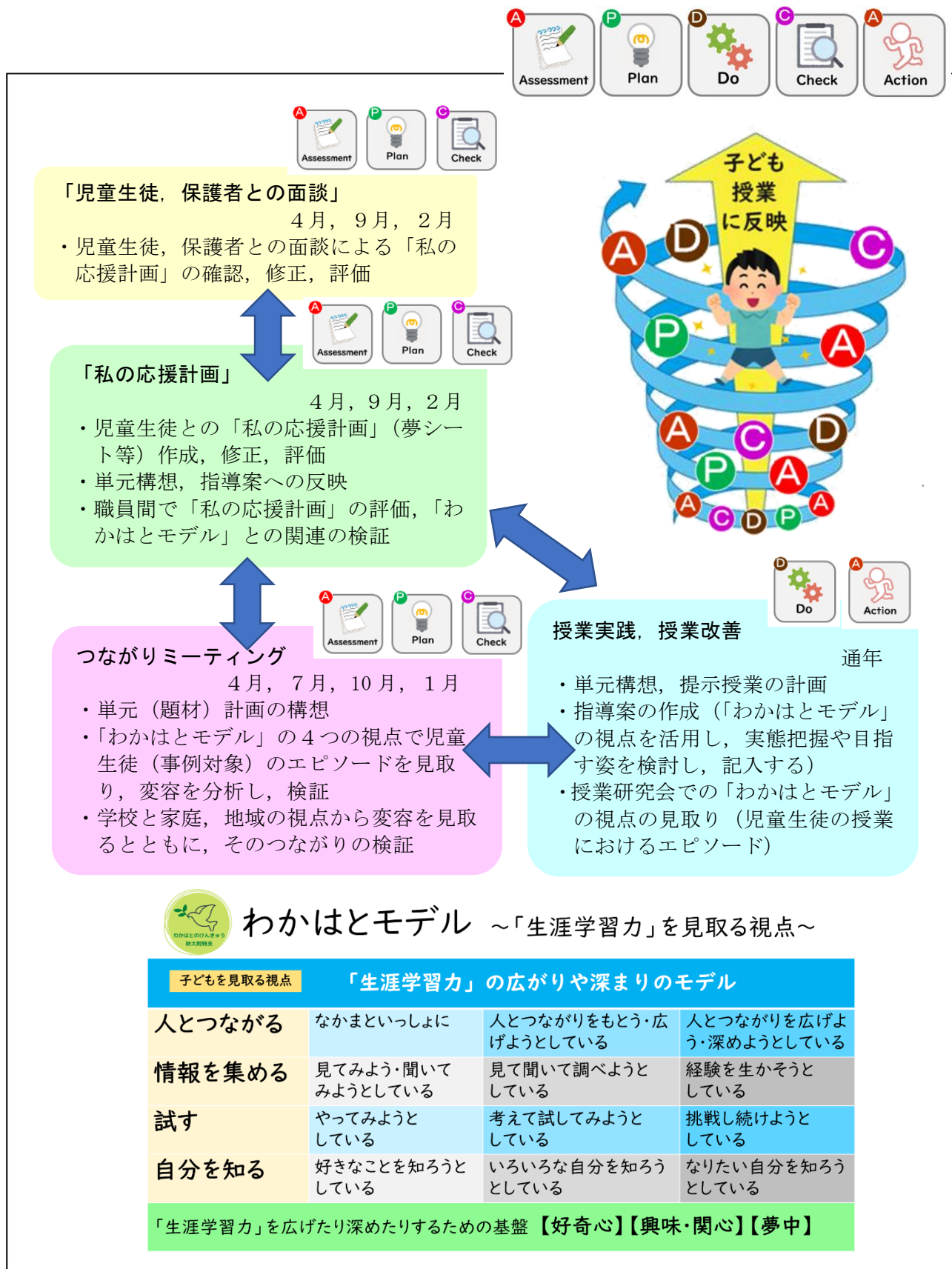


図4 わかはとシステム関連図

第2章 授業づくりの実際



小学部 授業づくりの実際

1 はじめに

(1) 昨年度の取組

昨年度は、児童の夢や願いを基点にした生活単元学習の授業づくりの流れについて検討、整理を行った。また、「私の応援計画」の作成や単元計画、授業評価など様々な場面において、「わかはとモデル」を児童の姿を見取る視点として活用し、機能することを目指した。

授業づくりの流れを繰り返すことで、児童の夢や願いから授業をつくるプロセスが教師の中に根付き、単元計画や活動設定の根拠が児童にある、より児童が主体となる授業づくりを行うことができた。また、「わかはとモデル」の視点で児童の姿を見取ることで、児童の行動とその背景や内面の機微を見取ろうとする教師の意識が高まった。一方で、「私の応援計画」と「わかはとモデル」をつないでいくこと、「わかはとモデル」で見取った児童の身に付けたい力と、育てたい資質・能力との関連を明確にすること、児童の夢や願いに立ち返る評価や評価ツールの工夫が、課題として挙げられた。

(2) 本年度の研究

昨年度の研究で挙げられた課題から、本年度は次の3点の取組を行うこととした。

- ①「私の応援計画」作成の基となる、児童との面談の在り方についての検討
- ②「わかはとモデル」で見取った児童の姿と、授業との妥当性の検討、育てたい資質・能力の明確化
- ③ICTを活用したエピソードシートへの日常的な記録

これらの取組により「わかはとシステム」を活用した授業づくりがより充実するよう、実践を重ねた。

2 研究の実際

(1) 児童との面談の在り方についての検討

「私の応援計画」作成の基となる児童との面談において大切にしたいことを小学部職員で話し合い、次のように整理した。

- ・夢や願いを引き出そうとするのではなく、自分の好きなことや頑張りを知ったり、気付いたりできるようにすること。
- ・学習を振り返り、言語化したり、視覚化したりすること
例：「～が楽しかったんだね」「～が好きなんだね」
- ・面談のタイミングにこだわらず、普段の見取りや単元終了後の振り返り活動を、対話を通して充実させること
- ・教師が「わかはとモデル」の視点を意識して問い掛けたり、価値付けたりすること
例：「〇〇さんと一緒にやったんだね」（人とつながる視点）
「難しかったけれど、チャレンジしたね」（試す視点）
- ・小学部は「生涯学習力」の素地を育む段階である。現在の学習を振り返り、楽しかったことや好きなこと、興味のあることなどの「思い」を膨らませたり、児童が実感したりすること

また、児童が自分の思いを再度認識したり、友達の夢や願いを知ったりすることができるように、面談で見取った一人一人の思いを各学級の実態に合わせて視覚化（図1）し、教室内に掲示した。イラストを使用したり、友達と同じものに気付けるように学級で1枚の掲示にしたり、児童自身が作成したりするなど、各学級で工夫した。



図1 児童の思いを視覚化した掲示

(2)「わかはとモデル」で見取った児童の姿と、授業の妥当性の検討、育てたい資質・能力の明確化

①単元構想検討会での検討

児童との面談や授業の振り返りで、「わかはとモデル」の視点を活用して児童の思いを見取った。学部職員で行った単元構想検討会では、児童の思いがより充実するよう、育てたい資質・能力や学習活動、手立てなどの工夫について検討した。公開研究会に向けた単元構想では、研究協力者である秋田大学の鈴木徹先生にも参加してもらい、助言をいただいた。

②「つながりミーティング」での事例検討

「つながりミーティング」では、担任が見取った児童の思いやエピソード等を共有し、授業で見られた姿を「わかはとモデル」の視点を活用して捉え直した。そのうえで、単元の内容や年間の構想について検討したり、授業の仕掛けのアイデアを出し合ったりした。

③授業で見られた児童の姿の捉え直し (図2)

育てたい資質・能力の妥当性を検討するために、授業後に行った授業研究会で出された児童の姿を改めて「わかはとモデル」の視点で捉え直した。改めて見取った児童の学ぶ姿から、学習指導案の「単元を通して目指す姿」につながるための今後の手立てや学習活動の工夫を検討し、授業改善につなげた。

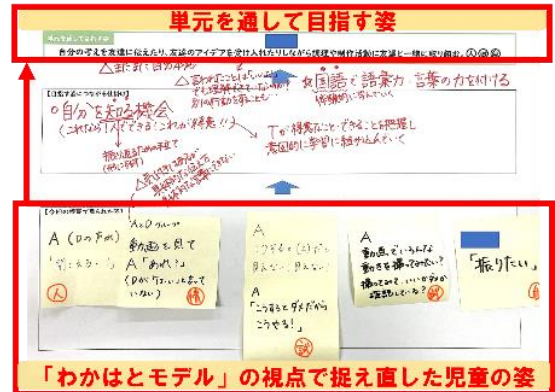


図2 児童の姿の捉え直し

(3) ICTを活用したエピソードシートへの記録 (図3)

デジタルノートアプリ「ロイロノート・スクール」を活用し、児童の印象的だった姿を写真で蓄積した。教師が負担感なく取り組めるよう、学級通信や学習の記録用に撮影した写真を活用し、教師の見取った内面や背景を書き込んだ。毎週、曜日を決めて10分程度時間をとり、児童の姿について雑談しながら書き込んだり、連絡帳の保護者からの記載を載せたりした。また、児童との面談や学習の振り返りで、エピソードシートに記録してきた写真を活用した。写真を見て一緒に振り返りながら、児童の思いに立ち返り、現在の思いについて、対話を行った。



図3 ロイロノート・スクールを活用したエピソードシート

3 授業の実際

(1) あおば学級（5・6年生）「あおば探検隊・修学旅行編～秋田と仙台の名物を調べよう～」

（全校授業研究会：6月）

①単元設定に当たって

「私の応援計画」作成のため行ったあおば学級の児童との面談では、「みんなで出掛けたい」「先輩と話がしたい」「（修学旅行で行く）仙台と秋田の美味しい物を調べたい」という思いを見取った。また、教師が「わかはとモデル」の視点で日常の児童の姿を捉え直すと、自分の思いを伝えたり、相手の思いを受け入れたりする姿や、友達の様子を見たり、聞いたりして情報を集める姿が見られるようになってきたことが分かった。これらの姿を踏まえ、児童が自分の思いや気づきを友達や教師に伝えたり、関わる相手を意識しながら活動に向かったりする姿を目指し、「あおば探検隊・修学旅行編～秋田と仙台の名物を調べよう～」の単元を計画した。

②授業の概要

単元設定に当たって見取った児童の思いが充実するように、ペアの友達と一緒に秋田と仙台の名物を中学部、高等部生へのインタビューとアンケートで調べたり、仙台出身の教育実習生にオンラインでインタビューして聞いたりした。また、調べたことを整理し、他のペアの友達に伝える活動を行った。これらの活動を通して、児童の目指す姿につながるように次のような仕掛けを工夫した。

目指す姿につながる仕掛け



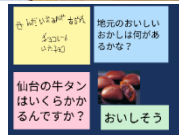
○秋田や仙台に詳しい人へのインタビュー

見たり、聞いたりして調べる経験を重ね、人とのつながりを広げる。



○ペアでの相談活動

自分の思いを伝えるための伝え方や話し方を身に付けられるようにする。



○気づきを記録する活動

友達と共有したり、振り返ったりして、気づきを周囲に伝える。

③全校授業研究会より

提示授業では、調べた仙台のお土産の中から、小学部の友達に何を食べたいか尋ねるアンケート（図4）をペアで作成する活動を行った。小学部の友達をイメージしながら制作できるよう、写真を準備したり、「○○さんは読めるかな」と問い掛けたりした。また、ペアで相談や役割分担をしながら取り組めるように、教師が伝え方を例示したり、児童同士をつないだりした。

協議では、「友達同士で課題に向かう姿」や「自分の思いや気づきを表現する姿」につながるねらいや仕掛けについて、効果的だった手立てや改善点について検討した。



提示授業の様子



図4 アンケート

協議の概要を図5のようにまとめた。

協議題 「友達同士で課題に向かう姿」や「自分の思いや気づきを表現する姿」につながるねらいや仕掛けについて						児童の姿	有効だった手立て	改善点
修学旅行のオリジナルソング		過去の経験を生かす工夫				教師の働き掛け		
笑顔で歌う様子	張り切って歌う様子	教師 「どうやって聞く？」	児童M 「アンケート」	児童N 「未体験の味」		教師 「何を載せたら分かりやすい？」	児童S 「…」	
みんなで学習に向かう意識	学習に見通しがもてる歌詞	活動の振り返り	実物の提示	経験を生かす	インタビューで得た情報の活用	「低学年の友達も分かりやすい」を具体化、言語化	→比較できる見本の提示方法	
本時の課題提示						やりとりや思考をする時間の充実	→書く活動を簡易化	
アンケートの見本を見て 児童N「これなら分かる」 「味(について書く)」	前に集まって 見本をみんなで見合い、 制作するものの例を吟味	ポイントを理解してから 制作するための ポイントの焦点化や流れの検討				児童O 「東北PREZ」と書く	↓ 教師の仲介	児童N 「片仮名や平仮名だといい」
過去に自分たちが 答えたアンケートの提示	特徴が分かりやすい 3種類のアンケート	意見を伝える 機会の設定	課題の共有	相手意識 目的意識		児童の気づきに	思いを引き出す つながる言葉掛け	代弁する言葉掛け
児童同士の関わりや 主体性								
児童M 「Lさんお願い」 「ここだよ」「書いてください」	児童Lの目指す姿や 活動内容・量の妥当性	「一人で」「自分から」 取り組む環境づくり						
ペアの活動	会話の仲介	具体的な話型の提示	友達と協力することの イメージや利点					

図5 全校授業研究会の協議記録

【協議のまとめ】

- ・話し合い活動の中で、児童の思いや気づきを教師が視覚化したり、言語化したりしながら仲介する。
- ・教師の言葉掛けの量や児童の配置の工夫を通して、教師の介入を減らしていく。
- ・自分たちで選んだり、決定したりする経験を積み重ねていく。
- ・児童の思考を促す活動を設定し、選んだり、言語化したりできるようにする。
- ・活動の絞り込みやペアの検討、主となる活動を焦点化していく。

【講評より】

秋田大学 准教授 鈴木 徹先生	うまくいかない経験が気づきへとつながる。うまくいかなかったことから何を学ぶのか、学習を展開していくことが大切である。 相談とは自分が主体となって行うものであるため、受け身での関わりが多い児童同士では、相談に発展することは難しい。主体的なコミュニケーションをとれる状況を自然に、日常的に作っていくことで、相談するという活動につながっていく。
県総合教育センター 指導主事 進藤 拓歩先生	活動の中で、抽象的なことを具体的にしていく必要がある。「おすすめ」や「相手の立場に立って考える」ことは難しいことではあるが、具体的な体験をすることで分かりやすくなる。また、制作と相談を同じ活動の中で行うことは複雑に感じる。相談する場面と制作する場面を分けたり、友達と関わらないと解決できない課題を設定したりするなどの工夫が考えられる。 小学部段階においてインタビューやアンケートの活動を行う場合は、国語科を要として、言語能力の育成や言語活動として取り扱っていいとよい。

(2) わかば学級(3・4年生)

「スイーツわかば～ふたば・あおばのともだちとスイーツパーティー～」(公開研究協議会:12月)

①単元の概要

わかば学級の児童は、「料理をしたい」「友達や教師と仲良くしたい」「野菜を育てたい」といった思いがある。「わかばとモデル」の視点で児童の姿を捉え直すと、自分の気持ちや思いをうまく伝えることが難しかったり、初めての活動や苦手な活動に対して消極的な姿が見られたりする一方で、友達や身近な教師への関心が高まっている。そこで、調理やお客さんの招待に向けた活動等を通して、同じ目的に向かって活動する楽しさを味わい、自分から活動に向かったり、積極的に周囲の人と関わろうとしたりする態度を育みたいと考え、「スイーツわかば」の単元を計画した。

単元構想検討会では、児童の思いが充実するよう、招待する相手を変えて、前単元での学びを生かした活動を設定することや、児童の心が動く経験を重ねること、振り返りの内容を視覚的に残していくこと、などの意見が出された。また、研究協力者の鈴木徹先生から、児童が「こうしたい」という思いを出せるように、様々な経験を積み重ねること、意思を表出していけるような支援を行うことを助言していただいた。

②授業の概要

「スイーツわかば」では、ミルクプリンやカップケーキなどの簡単なスイーツづくりに取り組んできた。単元の終末に保護者や身近な教師を招いたパーティーを行うことで、人に喜んでもらう経験や友達と共に活動する心地よさを味わうことができた。「～ふたば・あおばのともだちとスイーツパーティー～」では、自分たちで栽培したさつまいもを使ったスイートポテトの調理を行うパーティーを計画した。事前準備として、レシピの検討と招待状作り、レシピ動画作りに取り組んだ。自分の思いや気持ちを伝えながら関わったり、児童の「やってみたい」「こうしたい」という思いにつなげたりするために、次のような仕掛けを考えた。

小学部の友達を招待する活動



- ・喜んでもらう経験を重ねるとともに、ゴールを意識する。

気持ちの代弁・言語化



- ・自分の思いに気付き、気持ちの表現方法を知る

ペアやグループの工夫



- ・安心して気持ちを伝えたり、相手の意見に耳を傾けたりする。

③公開研究協議会より

提示授業では、パーティーで行う調理で活用するレシピ動画の制作に取り組んだ。「ポイントグループ」と「作り方グループ」に分かれ、「(動きを)大きく」「ゆっくり(話す)」「一緒に(考える)」を制作のポイントとして示した。撮影した動画を振り返る際には、教師が思いを補足して言語化したり、選択肢となるイラストを提示したりしながら、話し合いのコーディネートをした。

協議では、児童の思いに迫るために必要な資質・能力の妥当性について検討し、活動や手立ての工夫について協議した。制作のポイントに基づいて児童が自分の学習を振り返る姿や友達の意見に反応を示す姿、活動への興味・関心を示す姿から今後の学びの方向性について活発な意見交換が行われた。



提示授業での様子

協議の概要を図6のようにまとめた。

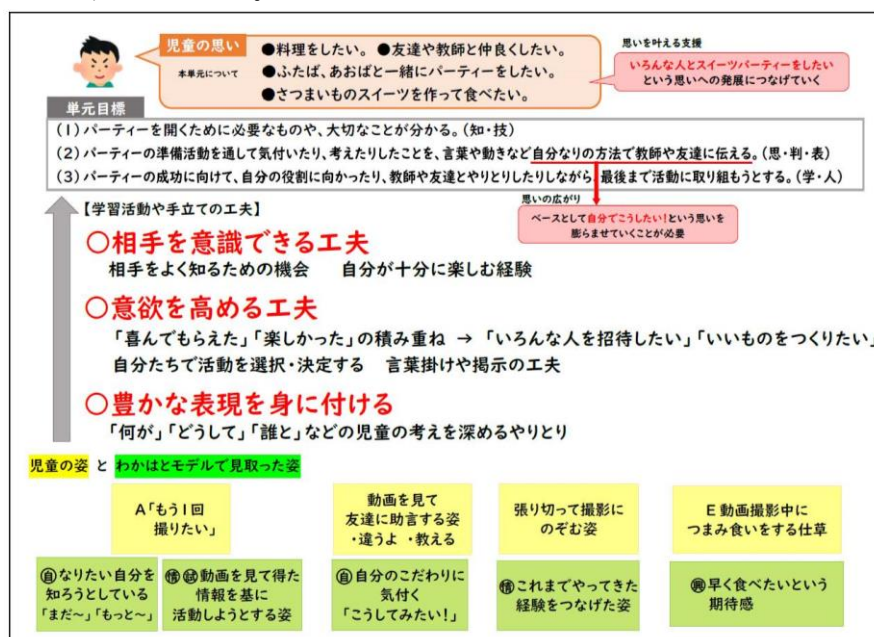


図6 公開研究協議会の協議記録

【協議のまとめ】

○相手を意識できるような工夫

- ・招待する相手をよく知る教師からアドバイスをもらい、改善のポイントとする。
- ・一緒に活動したり関わったりする活動を設定し、相手のことを知る機会とする。
- ・相手意識をもつ基盤として、自分たちが十分に楽しむ経験が必要となる。

○意欲を高める関わりや繰り返しの活動設定

- ・招待した人たちに喜んでもらえたという達成感や一緒に活動することの楽しさを感じることの積み重ねが「いろんな人とスイーツパーティーをしたい」「よりよいものを作りたい」につながる。
- ・自分たちで選択・決定したり、「こうしてみたい」と思ったりした活動であれば意欲は継続するのではないかな。
- ・モチベーションを上げる言葉掛けや関わり、掲示など学習外の場面における手立てが期待感や意欲につながるのではないかな。

○豊かな表現を身に付けるために

- ・児童の発言に対して「何が」「どうして」「誰と」などの質問をすることで、考えを深める。

【講評より】

秋田大学 准教授 鈴木 徹先生	学びにおいて習熟していく過程が次の思いにつながるため、子どもたちが「うまくなっていること」を実感していくことが大切である。トライアンドエラーを繰り返し、上達する過程で「次はこうしてみたい」という思いが膨らむため、教師が教えすぎるのではなく、子どもが自由に試行錯誤できる柔軟な授業構成も必要となる。
県総合教育センター 指導主事 進藤 拓歩先生	児童の言動をその子なりの「表現」として捉えることや、児童が抱く思いの背景を探ることが大切である。その際には、教師の様々な解釈を合わせて考えることを大切にしてほしい。同様にキャリアノートについても、言語化することが難しい思いや文字だけでは伝わらないことを教師が解釈しようとするのが大切である。

4 まとめ

(1) 研究の成果

①児童の思いの膨らみにつながる振り返り活動の充実

児童との面談で大切にしたいことを学部職員で話し合い、児童が自分の頑張りや好きなことに気付けるようにすること、普段の授業や単元終了後の振り返りを充実させることを共有し、授業づくりに取り組んできた。児童が学びを実感できるように、写真などを活用しながら対話を通して振り返ったことで、児童の発言が増え、「～が楽しかった」「次は～と一緒にやりたい」といった思いの膨らみにつながった。

②育てたい資質・能力の焦点化

授業研究会では、授業で見られた児童の姿を取り上げ、「わかはとモデル」の視点で捉え直した。それを基に、単元を通して目指す姿や身に付けたい資質・能力の妥当性を検討した。例えば、「友達のアイデアを受け入れて活動する」ことをねらいとした動画の撮影で、友達と決めた動きとは異なる動きをしている姿を「自分のいろいろな動きを撮ってみて、確認しているのではないか」（「わかはとモデル」の試す視点）と捉え直した。そこで、国語科の「経験したことや思ったことを言葉にして表現しようとする」力を身に付けるとよいのではないか、と検討し、授業改善につなげた。また、写真を用いたエピソードシートを活用し、毎週、児童の姿について教師間で気軽に話し合うことで、次の授業に向けたねらいや改善案も話題にすることができた。これらの取組により、授業における児童の姿と授業が往還し、児童の姿を根拠に、ねらいや身に付けたい資質・能力が焦点化されてきた。

(2) 課題と今後に向けて

①児童の思いを把握するための対話の在り方について

児童との対話を大切に面談や振り返りを行ってきたが、実際に取り組んでみると、面談で児童が学習したことを思い出すことや、年度初めのレポートが十分に築けていない状態で見取ることの難しさがあった。児童が自分の学びを振り返り、思いを表出できるように、次のような改善案が挙げられた。

- ・ 普段の授業で行った振り返り（写真、作文など）を蓄積し、面談の際に一緒に振り返るとよいのではないか。
- ・ まずは、「生涯学習力」の基盤となる「わかはとモデル」の「好奇心」「興味・関心」「夢中」の視点を大切に、言語化したり、共感したりして思いを膨らませていくことが大切ではないか。
- ・ 小学部段階では、保護者からの情報も有用である。保護者面談で得た情報を基に視覚的ツールを準備して児童との面談をするなど、面談の時期を柔軟に設定できるとよい。

また、面談での見取りを基に提示した児童の「思いシート」についても、児童が自分事として捉えられるように、教師と児童が対話をしながら一緒に作成することや、友達の思いに気付けるように、学級通信などを活用して保護者も巻き込んでいくことなどの改善案が挙げられた。

②「生涯学習力」の素地を養うために

小学部は、「生涯学習力」の素地を育む段階である。令和3年度、4年度の小学部研究では、「エンジョイタイム（※）」の実践で幅広い題材を設定したり、児童が素材にじっくり向き合う時間を確保したりしたことで、「生涯学習力」の素地となる「好奇心」や「興味・関心」、「夢中」の要素の膨らみを見取ることができた。これまで、児童の思いを基点にした「わかはとシステム」を活用した授業づくりを行ってきたが、児童の思いや願いの幅が狭く、芽生えの段階であることから、幅広い内容を取り上げる難しさがあった。児童の思いが充実するとともに、興味・関心が広がるような単元設定や教育課程の編成を検討していきたい。

※「エンジョイタイム」安心できる環境において、自分の得意な関わり方で、ヒト・モノ・コトに関わる経験を積み重ね、「生涯学習力」の素地を育む時間。興味・関心を広げたり、深めたりすること、自分の好きなモノやコトを知ることが、主なねらいである。

「わかはとシステム」による授業づくり

Assessment	子どもの夢・願い (私の応援計画)		
	料理をしたい いろんなところに出掛けたい	友達や教師と仲良くしたい 野菜を育てたい	
Plan	教師が子どもに願う姿	保護者の思い	
	自分の思いや気持ちを上手に伝えてほしい 様々なことに自分から取り組んでほしい 一つの活動にじっくり取り組んでほしい	気持ちを伝えられるようになってほしい 自分でできることが増えてほしい 色々なことに興味をもってほしい	
Assessment	わかはとモデルの視点		
	(興) 活動に自分から取り組んだり、教師や友達が活動している様子を見たりする。 (人) 自分から友達に関わったり、関わろうとしたりする。	(試) 試す (好) 好奇心 (夢) 夢中 (情) 情報を集める (自) 自分を知る (興) 興味・関心 (夢) 活動に時間いっぱい取り組んだり、笑顔で取り組んだりする。 (自) 楽しいことややってみたいことを選んだり、伝えたりする。	

Plan	生活単元学習	スイーツわかば
	スイーツの調理や、お客さんを招待すること、それに向けた活動等を通して、同じ目的に向かって友達や教師と一緒に活動する楽しさを繰り返し味わい、自分から活動に向かったり、積極的に周囲の人と関わろうとしたりする態度を育むことにつなげる。	
	【知・技】	様々な道具の使い方が分かる、相手に伝える話し方が分かる
	【思・判・表】	手順を見て自分で活動する、友達や教師に自分の思いを伝える
	【学・人】	時間いっぱい活動に取り組もうとする、友達と一緒に取り組もうとする
	関連する主な教科等 生活 国語 算数 図画工作	

Assessment	つながりミーティングⅠ・Ⅱ	
	(興) ヒトへの興味・関心からモノ・コトへの興味・関心へ広げていく (人) 似たような学習をしている先輩たちと交流する機会の設定	(人) ロールモデルとしての友達の存在 (自) 楽しい・やってみたいという気持ちの言語化→気持ちにつながる
Check	やってみたいことに気付き、意欲的に学習に向かうことができるように、似たような学習をしている学級と交流する機会や過去の学習の様子を見る機会を設定する。	
	自分の思いや考えを伝えられるように、同じペースで学習できる友達とのペアワークを意図的に設定していく。	
Plan	スイーツわかば ～パーティーをひらこう～ ～おうちのひととカップケーキパーティーをひらこう～	
	Do Action	

 Assessment	学部研究会	
 Check	好「こうしたい」「やってみたい」が生まれるように様々な経験を積み重ねる	自自分の思いや気持ちに気付けるように価値付けを意識した振り返り
 Plan	人関わる人を「広げる」視点と関わりを「深める」視点からの学習計画	試前単元の学びを生かせるような工夫
 Do Action	学習活動の振り返りなどの場面で、子どもの思いを引き出すだけでなく、教師側から見た子どもの様子を子ども自身にフィードバックする。友達との関わりが深まるように前単元と同じペアやグループでの学習を多く設定する。	
	スイーツわかば ～ふたば・あおばのともだちとスイーツパーティー～	

指導計画と他教科等との関連

スイーツわかば～パーティーをひらこう～ <ねらい> ・簡単なスイーツやパーティーで使う飾りを作る。 ・調理やパーティーで感じたことを自分なりに表現する。 ・身近な友達や教師に自分の思いを伝えながら一緒に活動しようとする。 <学習内容> ・おうちの人と一緒にスイーツを食べるパーティーの成功を目指して、繰り返し調理活動に取り組んだり、パーティーに必要なもの（飾り、招待状）を制作したりする。	【生活】 オ人との関わり 【国語】 A聞くこと・話すこと 【算数】 C測定 【図画工作】 A表現
スイーツわかば～おうちのひととカップケーキパーティーをひらこう～ <ねらい> ・カップケーキの作り方やパーティーを開くために必要なものが分かる。 ・調理やパーティーの準備で気付いたことや感じたことを自分なりに表現する。 ・調理やパーティーの開催に向けて、自分の思いを伝えたり相手の話を聞いたりしながら、友達や教師と一緒に最後まで活動に取り組もうとする。 <学習内容> ・おうちの人と一緒にスイーツを作るパーティーの成功を目指して、自分の思いや気持ちを伝えながらカップケーキの調理やパーティーの準備（招待状作り、レシピ動画作り）に教師や友達と一緒に取り組む。	【生活】 オ人との関わり カ役割 【国語】 A聞くこと・話すこと 【算数】 C測定 【図画工作】 A表現
スイーツわかば～ふたば・あおばのともだちとスイーツパーティー～ <ねらい> ・パーティーを開くために必要なものや、大切なことが分かる。 ・パーティーの準備活動を通して気付いたり、考えたりしたことを、言葉や動きなど自分なりの方法で教師や友達に伝える。 ・パーティーの成功に向けて、自分の役割に向かったり、教師や友達とやりとりしたりしながら、最後まで活動に取り組もうとする。 <学習内容> ・小学部の友達と一緒にスイーツを作るパーティーの成功を目指して、自分の思いや気持ちを伝えながらスイートポテトの調理やパーティーの準備（招待状作り、レシピ動画作り）に教師や友達と一緒に取り組む。	【生活】 オ人との関わり カ役割 【国語】 A聞くこと・話すこと 【算数】 C測定 【図画工作】 A表現

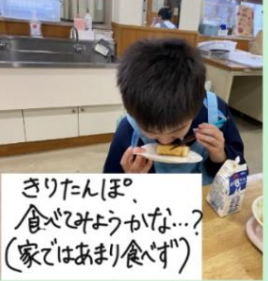
エピソードシート

探検隊秋田編

【好奇心】 【興味関心】 【夢中】



しぐり
みそをぬる



きりたんぽ、
食べみようかな...?
(家ではあまり食べず)

夢や願い

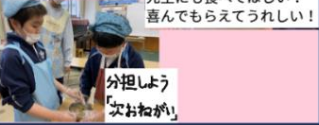


お店屋さんをやりたい!

【人とつながる】



先生にも食べてほしい!
喜んでもらえてうれしい!



分担しよう
「おねがい」

【情報を集める】

先輩に
ききたい



さくら大福
あるかな?



【試す】

みそをたくさん
ぬりたい。
どうせたらぬれる?



【自分を知る】



トピコは
好きな場所
でした。

探検隊仙台編

【好奇心】 【興味関心】 【夢中】



福島県の有名な
食べ物は何だろう?



憧れの先輩に聞いてみたい!



黒糖まんじゅうを食べたいね

夢や願い

秋田の美味しい物が分かった

きりたんぽを買って食べて
楽しかった

仙台は何だろう?

修学旅行でお菓子を買いたい

【人とつながる】

ペアの友達に教える、受け入れる



「～してもいい?」友達に確認しながら作る



【情報を集める】



中学部の先輩にアンケートをとりたい

【試す】

アンケートにこの
写真も載せたいけ
どはまらない...

【自分を知る】



食べたい! 買いたい!

中学部 授業づくりの実践

1 はじめに

(1) 昨年度の取組より

昨年度、生徒の夢や願いをより確実に授業に反映し、生き生きと学校生活を送ることを目指し、「私の応援計画」の作成や活用をした丁寧な授業づくりに取り組んだ。また、「わかはとモデル」を活用して生徒の学びを見取り、生徒の内面に関わる考察や解釈を教師同士で述べ合う授業研究会等を重ねたことで、授業改善につなげるとともに生涯学習力の高まりを実感した。

同時に「わかはとモデル」が生徒の今と将来（夢）をつなぐツールであるという認識を共有することができた。一方で、教師一人一人が「生涯学習力」をどのように捉え、中学部段階で生徒がどのような姿を目指すのかを、今一度共有し、同じ目線で指導する必要性を感じた。また「何を学び。何ができるようになったか」「次はこうしたい」というような、生徒自身が学びを実感し、学びをつなぐためのめあての設定や振り返りの在り方については、改めて授業実践を通して追求していくことを確認した。

今年度、研究主題にも掲げられる「わかはとシステム」の活用のため、授業づくりにおけるAPDCAサイクルの一つ一つの取り組みをより充実、かつ効果的なものにするために必要なポイントを中学部の実践を通して明らかにすることとした。

(2) 本年度の研究

上記の取組を受けて、本年度は次の4点を中学部研究の中心に据えた。

- ①学部として高めたい「生涯学習力」の共有
- ②「私の応援計画」を反映した授業づくり
- ③生徒にとって「実感」のある振り返り
- ④エピソードの蓄積と「わかはとモデル」を活用した見取り

中学部の実情に沿い、より成果を上げられる「わかはとシステム」の活用の在り方を探るために、①～④を関連させながら実践を重ねた。

2 研究の実践

(1) 学部として高めたい「生涯学習力」の共有

4月の学部研究会で、中学部生徒に期待する姿をイメージすると共に、高めたい「生涯学習力」について職員で検討した結果、次の4点にまとめられた。

仲間と一緒に楽しむ

新しいことが分かる、できる喜びを感じる

仲間と一緒にやってみようとする

感謝される喜びを感じる

これらの姿に導く授業とするために、昨年度までの授業実践の成果を踏まえながら、中学部で目指す授業像として再編成し、共通理解を図った（図1）。

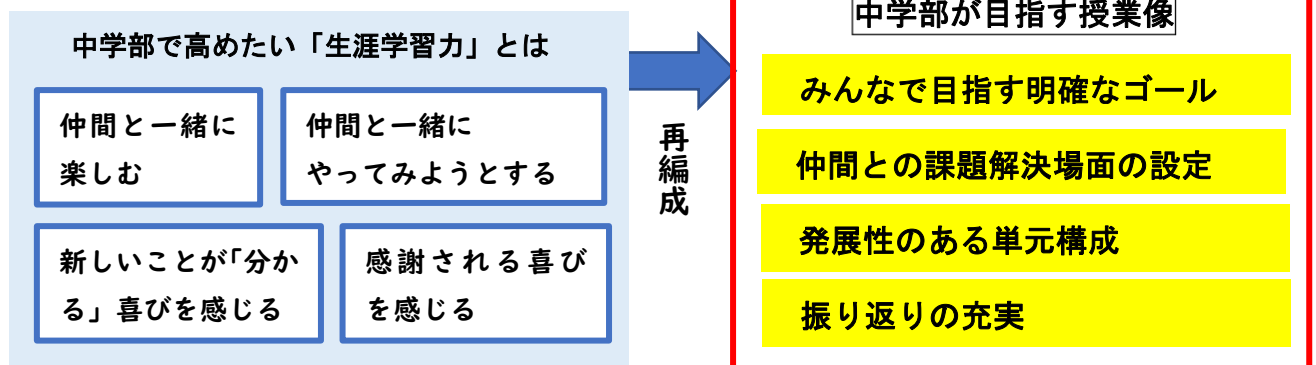


図1 中学部が目指す授業像

(2)「私の応援計画」を反映した授業づくり

生徒の夢や願いは、学級担任との面談を通して言語化され「ゆめシート」に記される。これに保護者や教師の願いを踏まえ、教育的ニーズを明らかにしたものが「私の応援計画」であり、本人を含む関係者がツールとして活用している。学校においては「個別の指導計画」を基に行われる教育活動全体の根拠となるものとして重要な位置付けを担っている。中学部研究では、昨年度生徒の夢や願いが「私の応援計画」や「個別の指導計画」へ反映され、授業づくりに生かされているか、その整合性や妥当性のチェックを実践の一つとした。こうした取組を今年度も継続すると共に、生徒との面談の在り方に着目し検討を行うなど、より生徒の目指す姿に迫るAPDCAサイクルによる授業づくりを目指した。

生徒との面談



①面談の在り方についての意見交換（職員研修）

年3回行われる生徒との面談の進め方や、発問の仕方など話し合った。「わかとはモデルと関連付けた面談の実施の仕方」「生徒の声をより具体的に引き出すための発問」「各学年における発達段階に応じた内容の設定」など、テーマを掲げて協議し、面談における留意事項の共有を図った（図2）。

単元検討



②単元検討（つながりミーティング、単元検討会）

全学部の職員から、縦割りでグループ編成し、取り扱う単元や単元のもつ可能性などについて検討する「つながりミーティング」を実施している。単元の発展性や交流機会の模索、学部間のつながりなどの意識が高まる機会として、授業づくりにおいて重要な役割を担っている。また、学部研究会で年間指導計画を見合い、各学年の単元構成についての共有に加え、学年を超えた活動の可能性などについて協議した（図3）。

授業実践

中学部が目指す授業像（前述）

【明確なゴール】【仲間との課題解決】【発展性のある単元構成】【振り返りの充実】

学びの見取り

「生涯学習力」の広が		
人とつながる	なかまといっしょに	人とつな
情報を集める	見てみよう・聞いてみようとしている	げようとし
試す	やってみようと	見て聞い
自分を知る	好きなことを知ろうと	している
	している	考えて試
		している
「生涯学習力」を広げたり深めたりするための基盤【4		

③学びの見取り

単元終了後、生徒の学習の様子（行動・発言などの事実）を挙げ、「わかとはモデル」の視点で生涯学習力の高まりについて、授業者間または、学部研究会等の場で教師それぞれの解釈を語り合った。これらを学年に応じたシート等に記録し（エピソードの蓄積）、次の単元や他教科・領域の授業等に生かした（図4）。

面談の在り方に関する協議より

- ・「ゆめシート」の中心には、なりたい仕事や記されることが多いが、仕事でなくてもよいのではないかな。
- ・学年によって質問すべき内容は変わってくるのが普通ではないかな。
- ・「わかはとモデル」に沿った面談にする必要はないかな。

図2 面談の在り方についての協議

3 学年の年間指導計画 (生単:5月現在)

月・主な行事	1 年生	2 年生	3 年生
5	未来自分プロジェクト～企画編	開店中2 クレープ屋①	中3ふしぎ発見！ in Tokyo 修学旅行編
6 修学旅行 終日作業 (13～19)	未来自分プロジェクト～調理編	開店中2 ○○屋(仮) I	中3ふしぎ発見！ ポテト新メニュー開発 編
7 宿泊学習 (4, 5) 学部 PTA(10) 水泳(18) 竿燈交流(19)	未来自分プロジェクト～職場見学 編		
8 竿燈(4) 9 特総体(13)	未来自分プロジェクト	開店中2 ○○屋(仮)	職場見学

図3 単元検討で使用した単元配列表

(3) 生徒にとって「実感」のある振り返り

生徒が学びに手応えを感じ、「もっとやりたい」「次はこうしたい」という学習意欲につながられるように、授業または単元ごとの振り返り活動の充実を図った。ワークシートや動画視聴など、これまで活用されていた手法の効果と共有しつつ、「ロイロノート・スクール」をはじめとした新たな手法がもたらす成果や課題について、実践を通して確認した。



「実感」のある振り返りのために使用した教材 (左: ワークシート 中: 話し合いの記録 右: 掲示用の記録)

(4) エピソードの蓄積と「わかはとモデル」を活用した見取り

生徒の行動や発言、制作物など授業時における事実から「わかはとモデル」の視点から生涯学習力の高まりを見取り、次の授業への反映を図り、授業づくりのサイクルを繰り返した。

各学年で使用しやすいシートを作成し、授業及び単元終了のタイミングで見取り及び記録した。

	単元前	単元後
人とつながる	積極的に人と関わることは少ない	「○○さん、…しますよ」 リーダーとして、友達の様子を気にしたり声を掛けたりする
情報を集める	困った場面において、聞いてみる対象としては教師がメイン	調理動画から必要な情報を取り出し活動 キーワードを変えながらウェブ検索
試す	話し合いで「絶対的に譲ります」 新たなことや未経験のことに対して挑戦してみようとすることは少ない	生活経験から、時短のアイデアを考え、試す(チューブ)
自分を知る	ネガティブな感情・発言が多い 自己肯定感が低い	失敗経験に弱い自分に向付く
好奇心 興味関心 夢中		夏休みも新しい料理をしてみたい

学びの様子の関わるエピソード

<記録について> 教員のニーズや(単元で「目指す姿」に関わるエピソードを優先的に記す。

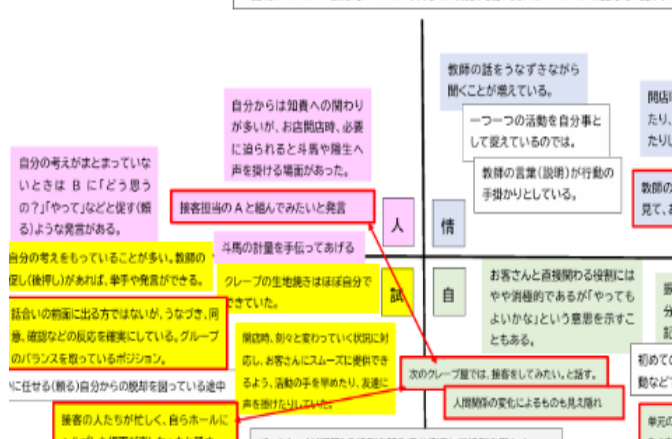


図4 「わかはとモデル」の視点による見取り

3 授業の実際

(1) 中学部3年 生活単元学習「中3ふしぎ発見～新作フライドポテトでおもてなし～」

(全校授業研究会：6月)

①単元の概要

昨年、中2のときの話し合いで出た「ポテトが食べたい」という声をきっかけに、ジャガイモの栽培、レシピ調べや調理などの活動に取り組んできた。さらに、小中学部の仲間や地域のこども園の園児など、多くの人に振る舞った。今年度、修学旅行の機会に専門店を訪れ、味や店舗に関する取材をするなど「ホンモノ」に触れることを通して、より主体的に調理や接客に取り組む姿への変容が期待される単元である。前述の中学部が目指す授業像に沿いながら、授業づくりにおける留意点を具体化し、次のように示した(図5)。

中学部が目指す授業像	留意事項
みんなで目指す明確なゴール	・ 修学旅行を中心とした学びを生かす一つの区切りとして、夏休み前に自分たちの力で成し遂げる「おもてなし」の場を設定する。対象は中学部の生徒と教師。
仲間との課題解決場面の設定	・ 試食会やアンケートなどでより多くの人の声を集め、取り入れることや改善することを話し合う活動を取り入れる。
発展性のある単元構成	・ 修学旅行で見聞きしたことを整理し、調理や接客の場で実行できる構成とする。
振り返りの充実	・ 生徒の実態や活動内容に合わせた振り返り用のワークシートを用意する。また、教室内にこれまでの授業の変遷を掲示し、取り組んできたことや今に至るまでの過程を必要な時に振り返る。



図5 中学部が目指す授業像に沿った単元の展開

②全校授業研究会より

この日は、校内の職員を招待しての試食会を開催。自分たちのポテト屋に付けるキャッチフレーズを決めるために、試食会でもらった感想などを視覚化し、思考する学習である。前時まで、自分たちが食べた感想から「おいしい」「カリカリ」「ほくほく」などのフレーズが挙がっていたが、お客役の職員から出てきた言葉の中には、自分たちとは違うニュアンスの言葉もあり、新たな気付きと共に学びを得る機会となった。協議及び指導助言の記録は次のとおりである(図6)。

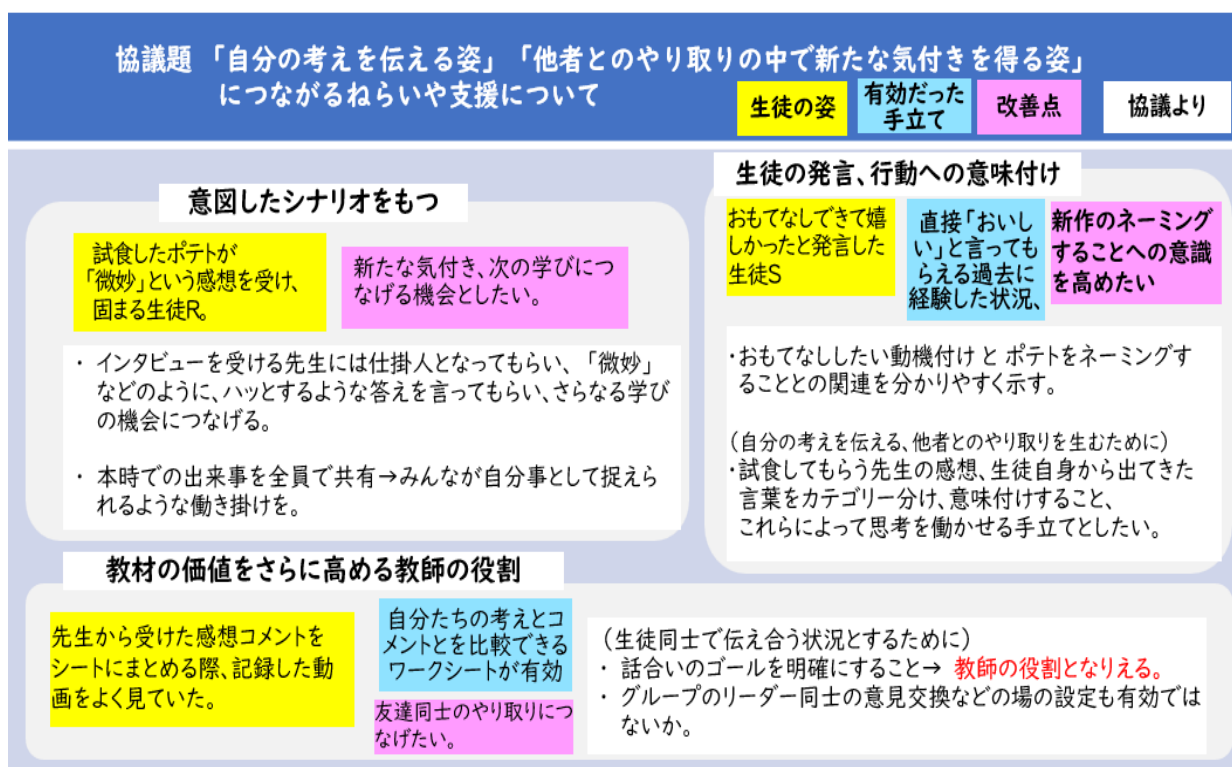


図6 全校授業研究会の協議記録

【講評から】

秋田大学 教職大学院 教授 藤井 慶博 先生	単元が計画的、継続的に構成されている。子どもたちにとって「ポテト」という題材が学校生活のテーマ、自分の学びのテーマとなっていた。 修学旅行で「専門店を巡ろう」と言い出したのは生徒なのかどうか。「こうしたい」「だから調べたい」「どう調べたらよいか」という声が生徒から出てくるようであれば、授業はさらに深まっていく。 単元終了後、生徒自身が「何が」「どのように」できるようになったかという成果を実感するために、どのような方法があるのか、授業者の準備が大切である。
秋田県総合教育センター 主任指導主事 島津 憲司 先生	「わかとはモデル」の視点のみに力点を置くあまり、生活単元学習の特徴の一つである「集団で学ぶ」良さを失うことのないよう『全員でテーマを共有しているか』『テーマに沿った活動に共に取り組んでいるか』などのポイントも押さえていきたい。 生徒にも「わかとはモデル」の視点を分かりやすい言葉で押さえられたら「生きる力」や「生涯学習力」の高まりにつながるのではないか。

（２）中学部２年生 生活単元学習「開店！炎のパワー クレープ屋さん」（公開研究協議会：１１月）

①単元の概要

昨年、自分たちで作ったかき氷やクレープを、教室の前を出店に見立てた店舗を設置し、校内の児童生徒や職員に振る舞った。生徒からは「自分の得意なことや経験したことを生かしたい」「お店をリニューアルしたい」「新しいことに挑戦したい」という声が上がった。また、保護者からは「自分の思いを伝えられるようになってほしい」「一人でできることを増やしてほしい」などの要望が挙げられた。



クレープ屋開店時の様子

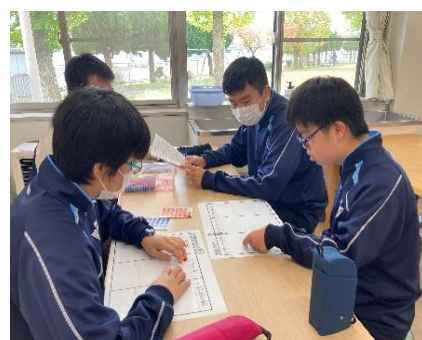
そこで今年度は、クレープ屋をテーブルと椅子席を用意した一室を店舗にしたカフェスタイルとしてリニューアルし、接客時にお客さんの要望などを受けて判断、行動することが求められる状況を設定した。また、昨年经验したことを継続する内容や役割分担とし、教師主導型の授業から、生徒が自分たちで考え、課題解決していく内容の設定とした。

中学部が目指す授業像	留意事項
みんなで目指す明確なゴール	・ 全校児童生徒、職員を数回に分けて招待、開店する。昨年度お店に来てくれた児童生徒、職員を再び招待することとし、ゴールまでの見通しをもちやすいようにした。
仲間と課題解決する場面の設定	・ 生徒が希望や得意なことを生かした役割分担を設定し、２～３人のグループでの活動を授業の中心に据える。調理や接客、制作に関わる中でお店に必要なことについて、協力が必要な場面を設定する。
発展性のある単元構成	・ 複数回開店する中で、自分たちで気付いたことや、お客さんのアンケートなどから分かった課題を話し合い、よりよいお店となるような授業を積み重ねていく。
振り返りの充実	・ 動画や写真で記録したものを毎時間の振り返りで活用する。 ・ 話し合いの過程や内容を視覚化できる教材や場の設定に留意する。

②公開研究協議会より

１１月から１２月にかけて、クレープ屋を３回に渡って開店する計画を立てた。本時は１回目の開店を終えた生徒が、反省点やお客さんのアンケートなどから明らかにした課題をどのような方法で解決するのかを話し合う活動であった。

話し合って決めたことを、実行するサイクルを繰り返すことで「自分たちのお店」という実感につながり、目的に向かって自分から行動したり、仲間と協力したりする姿につなげることを目指している。



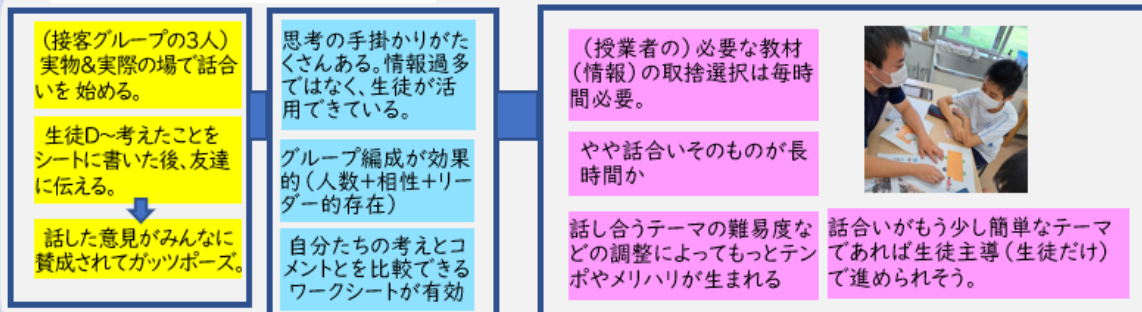
開店に向けた話し合い活動の様子

授業後の分科会（協議）では、話し合いの過程が視覚化されていた点や、話し合った内容を実際の場で試行する環境が効果的であった点、一方で「話し合った結果がどうであったか」を翌週お店の開店した後に検証することが、生徒が自分たちで話し合ったことの評価につながることなどの提案がなされた。

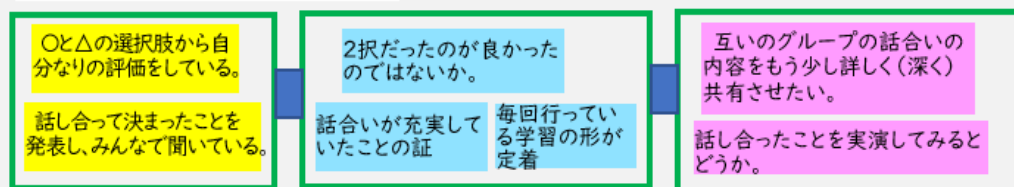
協議題 「分かった」「できた」「またやりたい」学びの実感につながる指導と評価の在り方について

生徒の姿 有効だった手立て 改善点 協議より

試行～思考⇒話し合いの深まり



学びの実感につなげる工夫



<グループ協議より(要点のみ)>

- ★「学び」を実感するために(話し合いの授業で大切にしたいこと)
 - ・話し合いの過程の見える化と評価 + フィードバック
 - ・話し合ったことを試行する場
 - ・「話し合った結果がどうであったか」という検証(話し合ったことの評価まで大切に)

図7 全校授業研究会の協議記録

【講評から】

秋田大学大学院 教授 藤井 慶博 先生	教材(話し合いシート)の工夫により、生徒同士で課題解決できる状況が成立していた。 記録することや推論することの弱さのある生徒の特性を、具体物の操作や実際場面を想定した場が設定されていることで補っている。 「わかはとシステム」の意味や、「わかはとシステム」が生涯学習との関連で目指すものを、子どもの姿を通して明らかにしていきたい。
秋田県総合教育センター 主任指導主事 島津 憲司 先生	お客さんのことを思っでの話し合いであったが、自分たちにとってどうなのか、「こんなお店にしたい」に近付けたのか、という視点をもっても良い。 話し合い活動の性質上、教師の役割が重要になる。生徒同士またはグループ間の仲介、思考の整理や修正など教師の働きかけに重要な意味合いをもつ。 「わかはとモデル」の活用によって見取ったことが、指導計画に反映されている。他者理解、自己理解の要素を含む授業である。

4 まとめ

(1) 研究の成果

①生徒の変容から

自分から行動したり、自分の考えを話したりできるようになっただけでなく、苦手な部分は友達同士で補い合い、集団の力で成し遂げられる場面が増えた。

発展しながら繰り返す単元設定から、生徒自身が「以前の自分と今の自分」を比較し、成長や学びを実感したり、適切な自己評価をしたりする姿につながった。

「誰かのために」という目的が生徒にとって分かりやすく、仲間同士で試行錯誤し、最終的に感謝される成功経験を積み重ねたことが、多少の困難にも集団の力で解決しようとする姿に結び付いた。

②生徒の思いを大切にした授業づくり

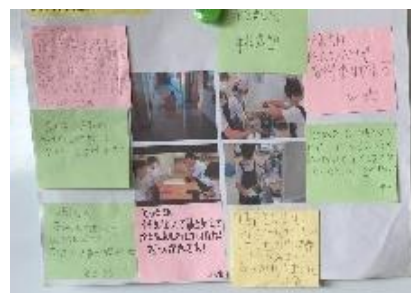
「わかはとモデル」の視点による見取りに加え、面談の在り方についての意見交換など、生徒との対話をより大切にしながら、授業づくりに臨む教師の基本姿勢が定着した。生徒の行動や発言に至る要因や背景に着目した考察を繰り返したことにより、教師による生徒自身へのフィードバック（意味付け、価値付け）のタイミングや内容も充実した。こうした取組により、生徒の思いがより授業に反映され、「できた」「またやりたい」実感につながったと考える。

③生徒にとって「実感」の伴う学び

『中学部が目指す授業像』に沿った授業づくりによって、単元終了後の生徒から「自分の頑張り」だけではなく、「友達とのエピソード」「今後自分（たち）が取り組みたいこと」など、幅広い内容の感想や手応えなど、具体的な発言や記述がみられるようになった。

教師の評価、生徒同士の評価によって、自分の行動や発言が周囲に良い影響を与えたことに気付き、学習意欲の向上や肯定的な自己評価などにつながった。

授業や単元の振り返りを学年の実情に応じて工夫し、授業研究会などを通して改善したことから、「学びの履歴」の視覚化が図られた。生徒自身が自分の成長を常時振り返ったり、確認したりできる環境が整備された。



振り返りの充実
(友達の良かった点の記入)

(2) 今後に向けて

①育成を目指す資質・能力と生涯学習力との関連

生活単元学習を中心とした授業および研究実践により、生徒の「生涯学習力」の高まりを見取り、授業づくりに反映することができた。これまでの研究の成果を踏まえつつ、中学部が目指す授業像を設定するなど、学部としての方向性を共有しながらの実践が実現した。

本研究を推進する中で、「育成を目指す資質・能力」と「生涯学習力」との関係性について、整理することで、本校の授業実践や「わかはとシステム」が目指すものがより明確になると考える。

②生徒と共有する「わかはとモデル」

生徒との面談の在り方について意見交換し、より生徒の声を引き出すための発問の仕方などについて、教師自身の学びにもつながった。その中で、生涯学習力を見取る視点として活用している「わか

はとモデル」を，生徒と共有することはできないか，という意見も上がった。「わかはとモデル」を，生徒の夢や願いと「今」をつなぐツールとして，面談等での活用により，一層の生涯学習力の高まりが期待できるのでは，というものである。「わかはとモデル」が果たす役割や活用の仕方等に関して，過年度研究においても検討と改定が重ねられてきたが，この点についても次年度以降の全体研究との関連の中で議論を要する。

「わかはとシステム」による授業づくり



子どもの夢・願い (私の応援計画)	
お店に全校のみんなを招待したい。	自分の得意なことや経験したことを生かしたい。
お店をリニューアルしたい。	新しいことに挑戦したい。(でもちょっと不安)

教師が子どもに願う姿	保護者の思い
人との関わりの中で学んでほしい。	一人でできることを増やしてほしい。
学んだことを様々な場で発揮してほしい。	自分の思いを伝えられるようになってほしい。
みんなで成し遂げる達成感を味わってほしい。	生活に生かせる力を付けてほしい。

わかはとモデルの視点	
人 人とつながる 情 情報を集める 試 試す 自 自分を知る 好 好奇心 興 興味・関心 夢 夢中	人 ① 自分の考えや気付いたことを友達と伝え合いながら課題をクリアする。 試 ② 教材やモデル（教師や友達の手本）を手掛かりに新しいことに挑戦しようとする。
	情 ③ 解決したいことを経験から考えたり、友達や教師との関わりの中で明らかにしたりする。 自 ④ 自分の取組を振り返ったり、仲間同士の良い点を認め合ったりする中で自分や友達の良さに気付く。



生活単元学習	開店！ 炎のパワー かき氷屋さん
昨年「屋台スタイル」で開店したかき氷屋、クレープ屋をテーブルと椅子席を用意した一室を店舗にしたカフェスタイルとしてリニューアルする。基本的な接客やスムーズな品物の提供が求められる状況を設定する。	
【知・技】	お店を開店するまでに必要な準備、よりよい調理や基本的な接客の仕方が分かる。
【思・判・表】	開店準備や接客を通して、自分の考えを伝えたり、相手の意見を受け入れたりしながら活動する。
【学・人】	自分や友達の活動の様子を認め合い、得意なことに進んで取り組んだり初めてのことにでも取り組もうとしたりする。
関連する主な教科等 国語科 社会科 美術科 職業・家庭科	



つながりミーティングⅠ	
人 お客さんの対象を自分たちで決める。	情 お店の発展のために新たな課題設定を検討する。
試 新たなメニューへの挑戦。自分たちで運営するお店	興 自分たちがレベルアップしてきたことが実感できる評価、振り返りの機会と充実
・経験を基にした話し合いができそうなテーマ設定（グルーピングの工夫、人数調整にも留意） ・評価の充実（教師による称賛、お客さんからのコメント、振り返り＆生徒同士の評価）	



開店！炎の中200屋さん⇒〇〇の部分は生徒による話し合いで決定（招待するお客さんの対象なども）
--



つながりミーティングⅡ

※対象生徒の変容や今後の目標設定等に関する情報交換

人 少人数学習の良さを生かした環境設定
(縦割り他学部との交流も視野に入れて)

人 小学部や高等部を関わる学習の設定

自 気持ちを表現する場の保証、振り返る場(客観性、メタ認知)

- ・本格的な単元実施を前に、クラス内での活動グループを十分吟味する(検討)
- ・他学部の児童生徒をお客さんとして招待することは必須、機会があれば高等部に学ぶ

開店！炎のパワー かき氷屋さん

指導計画と他教科等との関連

開店！中2クレープ屋 ～新入生を招待しよう～

<ねらい>

- ・昨年取り組んだ活動や役割を思い出し、できるだけ自分たちの力でお店を開店する。
- ・調理や接客を通して、友達やお客さんに必要な言葉を話したり、受け入れたりする。
- ・新入生に喜んでもらうことを意識して、みんなで協力して調理や接客を行う。

<学習内容>

- ・調理器具の準備や場の設定 ・クレープの調理 ・チラシ制作・注文の聞き取り

- ・国語科(A聞くこと・話すこと 中学部2段階イ～エ1段階オ)
- ・社会科(A社会参加ときまり、 中学部2段階ア)
- ・職業家庭科
(職業B 情報機器の活用1段階アイ 家庭ウ 調理の基礎アイ)

開店！炎のパワー かき氷屋さん

<ねらい>

- ・お店を開店するまでに必要な準備、よりよい調理や基本的な接客の仕方が分かる。
- ・開店準備や接客を通して、自分の考えを伝えたり、相手の意見を受け入れたりしながら活動する。
- ・自分や友達の活動の様子を認め合い、得意なことに進んで取り組んだり初めてのことに挑戦しようとする。

<学習内容>

- ・開店に向けての話し合い・複数回の開店(改善を重ねる)・調理、接客

- ・国語科(A聞くこと・話すこと 中学部2段階イ～エ1段階オ)
- ・社会科(A社会参加ときまり、 中学部2段階(ア))
- ・美術科(A表現2段階ア(ア))
- ・職業・家庭科
(職業B 情報機器の活用1段階アイ 家庭ウ 調理の基礎アイ)

開店！炎のパワー クレープ屋さん

<ねらい>

- ・クレープ屋を開店するまでに必要な準備、調理方法や基本的な接客の仕方を覚えて、自分の役割に生かす。
- ・これまでの経験を基に、より良い調理や接客の仕方を考え、自分の意見を伝えたり、友達の意見を受け入れたりしながら活動する。
- ・自分や友達の活動の様子を認め合い、得意なことに進んで取り組んだり、初めてのことに一人でもまたは友達と一緒に挑戦しようとする。

<学習内容>

- 単元①②と同様の活動+ メニューの考案・決定、招待状の作成、接客練習 他

- ・国語科(A聞くこと・話すこと 中学部2段階イ～エ1段階オ)
- ・社会科(A社会参加ときまり、 中学部2段階ア)
- ・美術科(A表現2段階ア(ア))
- ・職業・家庭科
(職業B 情報機器の活用1段階アイ 家庭ウ 調理の基礎アイ)

エピソードシート

<資料2>

対象生徒	中学部 2年 F (女)	
生徒の願い	・歌手になりたい ・バスケット選手になりたい ・歌とダンスをしてみたい ・バスケットをしたい ・ピアノを弾いてみたい ・パソコンで調べ物をしたい	保護者の願い ・身の回りのことを一人でできるようになってほしい。 ・積極的に発言、行動してほしい。 ・体を動かすことの楽しさを知ってほしい。 ・大きな声であいさつしてほしい。 ・一人で買い物に出かけられるようになってほしい。 ・整理整頓ができるようになってほしい。 ・衣類をたたむ習慣を身に付けてほしい。 ・一人でバスに乗れるようになってほしい。 ・日常生活に困らない程度の漢字の読み書き、計算ができるようになってほしい。
私の目標	【学校】 ・ お金の勉強を頑張る ・ 体力をつける ・ 体育でバドミントンを頑張る ・ 仲間と一緒に話し合いながら行動する。 【家庭】 ・ 食器運び、洗濯たたみ、食器洗いの手伝いをする。	
【教育的ニーズ】	・生活場面で活用できる計算に仕方覚えたり、情報の集め方を知る。 ・身近な友達や教師に、自分の気持ちや考えを伝えるように話す。 ・学級や学部の集団の中で、積極的に自分の役割を見つけて取り組む	【目指す姿】(中心単元) ・調理や接客場面や、計画について話し合う場面、自分の考えを友達に伝える姿。 ・知りたいことを、友達や教師に聞いたり、自分なりの方法で調べたりする姿
【学びの様子の関わるエピソード】 <記載について> 教育的ニーズや(単元で)「目指す姿」に関わるエピソードを優先的に記す。 自分の考えがまとまっていな いときは B に「どう思う の?」「やって」などと促す(頼 る)ような発言がある。 自分の考えをもっていきが多い。教師の 促し(後押し)があれば、挙手や発言ができる。 話し合いの前面に出る方ではないが、うなづき、同 意、確認などの反応を確実にしている。グループ のバランスを取っているポジション。 誰かに任せ(頼る)自分からの脱却を図っている途中 接客の人たちが忙しく、自らホールに ヘルプした場面が楽しかったと話す。 【興味・関心・好奇心】 高等部を招くことに意欲を示す。楽しみにする様子 自分からは知貴への関わり が多いが、お店開店時、必要 に迫られると斗馬や陽生へ 声を掛ける場面があった。 接客担当の A と組んでみたいと発言 斗馬の計量を手伝ってあげる クレープの生地焼きはほぼ自分 でできていた。 開店時、刻々と変わっていく状況に 対応し、お客さんにスムーズに提供でき るよう、活動の手を早めたり、友達に 声を掛けたりしていた。 バックヤード(調理)の役割を積み重ね安定して役割を果たす。 教師の話やうなづきながら 聞くことが増えている。 一つ一つの活動を自分事と して捉えているのでは。 教師の言葉(説明)が行動の 手掛かりとしている。 開店時には、周囲の様子を見 たり、知貴や教師の声を聞い たりして行動していた。 教師の指示がなくても、友達の動きを 見て、お店の混雑状況を感じて行動 お客さんと直接関わる役割には やや消極的であるが「やって もよいかな」という意思を示すこ ともある。 振り返りのワークシートに自 分や友達の良かったところを 記している。 初めてのことに物怖じするが、生徒会や部活 などで人前に立つ経験が力になっている。 単元の振り返り、友達の良かった点を具体的に たくさん挙げる。 【その他の活動から】 班のリーダーとして、考えを話す、整列の 先頭に立つなどの役割を果たす。【宿泊】 iPad の入力、写真やイラストのレイアウト 考案などに積極的に取り組む【国語】 〇〇とのやり取りを楽しみながら活動して いる。【国語】 買い物の誘いに応じて、出かける。【家庭】 作業の報告の声が大きくなる。その内容も 具体的になってきている。【作業】 作業のはじめの会の時間になると周囲に 「始めるよ」と声をかける【作業】 自発的に教室のごみ捨てをするようになる 【日生】 【部活】練習についていけないことがあり、 「やめたい」と漏らすも、〇〇の励ましな どを受けて立ち直る。		

	単元前	単元後	備考
人とつながる	積極的に人と 関わることは 少ない	「〇〇さん、… しますよ」 リーダーとして、友達の様子を 気にしたり声を 掛けたりする	友達への自然なフ ォローや言葉掛け (教える、読み上 げ、心配、応援、 依頼) 友達のよいと ころを知り、 認める発言
情報を集める	困った場面にお いて、聞いてみ る対象としては 教師がメイン	調理動画から 必要な情報を 得る 友達に相談し て解決、報告 キーワードを 変えながらウ ェブ検索	失敗経験 やり直しが可 能な単元構成
試す	話し合いで 「絶対に譲 りません」 新たなことや未経 験のことに対して 挑戦してみよう とすることは少ない	生活経験から、 時短のアイディ アを考え、試す (チューブ)	
自分を知る	ネガティブな 感情・発言が 多い 自己肯定感が 低い	失敗経験に弱 い自分に気付 く	
好奇心 興味関心 夢中		夏休みも新しい 料理をしてみ たい	家庭で玉ねぎの みじん切りを練 習する

高等部 授業づくりの実践

1 昨年度の研究から

(1) 「Dスタディ」における取組

高等部では、これまでの「生涯学習力」をテーマとした研究を通して令和2年度に設定された授業である「Dスタディ」を研究対象として実践を重ねてきた。Dスタディでは、生徒の思いや願いを基に単元を構成し、問題発見、情報収集、整理・分析、実行（やってみる）の探究型のプロセスを繰り返すことで学びを深めている（図1）。

これまでの研究から、「Dスタディ」の授業を通して、生徒の興味関心を広げたり、意欲的に学びに向かう姿を育てたりすることができたと考える。そこで、今年度も高等部では「Dスタディ」の授業を研究対象とすることとした。

Dスタディ＝生涯学習力を高めるための探究型の学習プロセスを導入した生活単元学習

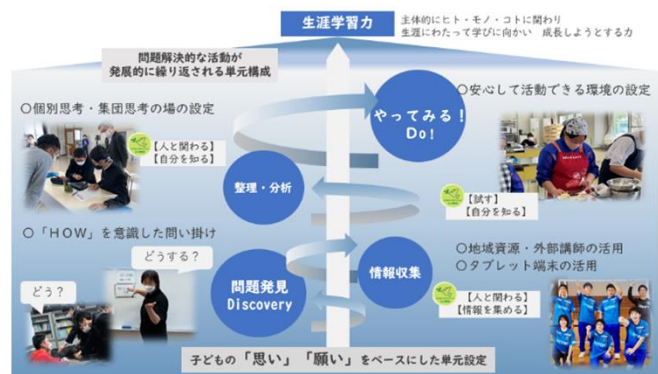


図1 Dスタディの学習について

(2) 昨年度の研究から

昨年度の研究では、生徒の思いや願いを大切にした授業づくりをすることで、生徒が学習内容の見通しをもちやすくなり、安心感を持ちながら学習に臨むことができるようになった。

また、「わかはとモデル」の視点を活用した見取りを継続してきたことで、職員に見取り方が定着してきた。

一方で、指導者のツールである「わかはとモデル」と、当事者のツールである「私の応援計画」を関連させ、相互に効果をもたらす結び付け方について、さらに検討する必要が感じられた。

2 研究の内容及び方法

(1) 「私の応援計画」を反映した授業づくり

本校では、本人主体の個別的教育支援計画である「私の応援計画（高等部生徒用）」（図2）を作成している。その中で、作成や評価の過程で教師が生徒と面談し、本人の思い、願いを聞き取ることが大切になっている。今年度は生徒との面談の際に、「わかはとモデル」の視点で振り返る機会も設けた。「わかはとモデル」をイラスト化した「面談シート」（図3）を活用し、教師と生徒が一緒に「わかはとモデル」の視点を生かしながら、日々の生活について考えることとした。

図2 私の応援計画（高等部生徒用）

(2) エピソードシートの作成

今年度「Dスタディ」のグループごとにエピソードシートを作成した。グループ全員分の記入枠を準備し、「Dスタディ」の授業で見られた様子、その他の授業で見られた様子、家庭や地域生活で見られた様

子を記録した。生徒の様子を「わか
はとモデル」で見取り、生徒の言葉
や行動、写真などを記録した。

授業を提示した星グループと月グ
ループは、事例対象の生徒を決め
て、その生徒について記録したエピソードから高等部職員でさらに見取りを行った。

（３）「私の応援計画（社会人用）」 の試行

特別支援学校を卒業し、一般事業
所に就労している卒業生を対象に「個別

移行支援計画」を作成する。「個別移行支援計画」の作成については、「これらの機関を機能的に結び付ける実践は未だ手探りの状態が続いており、依然として障害のある子どもやその保護者にとって相談体制や情報提供が不十分であったり、切れ目のない支援体制の中で安心して一貫した療育・教育や就学支援を受ける状況まで至っていなかったりするのが現状である」（岩本，小久保，小屋敷，奥 2022）と言及されているように、本人が活用する場面が少ないという課題が挙げられている。本校でも、「個別移行支援計画」を作成するものの、本人が活用するまでに至っておらず、「私の応援計画（高等部生徒用）」のように本人の思いや願いを基にした「個別移行支援計画」の作成が望ましいという声が挙がっている。

そこで、今年度は「私の応援計画（社会人用）」（図４）を作成し、本人の思いや願いを基に卒業後の生活について考える機会を設けることとした。記入する項目は働き方，暮らし方，楽しみ方の三つである。３年後に目指す姿のほか，一年ごとの目標や支援してほしいこと，振り返りなどを記入できるようにした。令和５年度に本校を卒業し，一般就労した３名を対象に試行することとした。



図３ 面談シートの一例

私の応援計画（社会人用）		名前 [REDACTED]
目指す姿	取り組むこと（支援してほしいこと）	評価
＜働き方＞ 正しいで正確に 仕事が出来るように なる アドバイスをしていた いから覚えて自分の ペースに合う	1 周囲を確認しながらやる（朝礼で注意点を伝えてほしい） アドバイスを覚える（メモをする時間を作してほしい）	
	2	
	3	
＜暮らし方＞ 車を買いたい	1 金さんをする（通帳の管理を手伝ってもらう）	
	2	
	3	
＜楽しみ方＞ おでかけにいきたい いけふらのアミイト いきたい はがねにのりた	1 プランを立てる（旅行コースをみる） 何で行くのかしらべる（バス・バス） 行き先などを知る（席の予約がした） 情報をください	
	2	
	3	

図４ 私の応援計画（社会人用）

3 授業の実践

(1) 星グループ「発見★チャンネル～ボウリングの楽しさ～」(全校授業研究会：7月)

①単元の概要

星グループでは、4月に「Dスタディでやってみたいことランキング」を一人一人作成し、友達と一緒に学びたいことについて意見を出し合った。本グループの生徒は「友達と楽しいことをしたい」「体を動かす活動をしたい」「バスに乗って出掛けたい」といった思いを抱いていることから、ランキングの結果を基に、ボウリングを活動の中心に設定した。

また、動画視聴を趣味とする生徒が多く、動画作成に興味をもつ生徒もいることから、授業の終わりに簡単な動画撮影の活動を設ける(時の振り返り)

→②本時の活動→③本時のまとめ→④動画撮影(本時のまとめと次時の導入として)という流れで繰り返し、学習を積み重ねた。

星グループの生徒は、小学部から本校に在籍する生徒が多く、中学部から入学した生徒、高等部から入学した生徒が数名いる。小学部から入学した生徒は、友達と一緒に活動に取り組む楽しさや、協力して何かを成し遂げる喜びを味わう経験を重ねてきた一方で、休日に友達と出掛けたり一人で外出したりという経験は少ない。高等部から入学した生徒は、休日に友達と出かける経験を重ねている一方、校内でリーダー的な役割を果たしたり、友達と協力して取り組んだりする経験は少ない。

つながりミーティングⅠでは、生徒のやってみたいこと、誰かが経験したことにみんなで取り組むことで、「やってみたら楽しい」「行ってみたら楽しい」という経験を重ねることを目指すことを確認した。

②授業の概要

「発見★チャンネル～ボウリングの楽しさ～」の授業では、校外学習でボウリング場へ行くために、地域のボウリング場について調べ学習をした。実際にボウリングを経験した後は、校内に「スターボウリング」を開店するための準備をしたり相談をしたりした。模擬ボウリング場を作って友達を招待した後はアンケートをとり、回答から良かった点や改善点などについて検討、改善をする時間を設けた。

③全校授業研究会より

提示授業では、「ストライクを出したい人」や「思った通りに転がらないことを楽しみたい人」が楽しめるボールを考え、選ぶ活動を行った。地域のボウリング場でボウリングを体験した際に、ストライクやスパアを出すことを楽しんだ生徒がいた一方で、ガターやボールが思い通りに転がらないことを楽しむ生徒がいた。様々な楽しみ方ができるように、複数のボールを準備することにした。

一人2回ずつボールを転がし、大きさ、重さ、転がり方、手触りの観点でボールを比べることができるように、板書でそれらの言葉を示した。ボールを転がしてから二つのグループに分かれて、「ストライクボール」「ガタガタボール」に合うボールを選び、理由も含めて意見を紹介しあった。

授業後の協議会では、以下のような意見が出された(図5)。



ボウリングを体験する様子



授業のまとめに動画を撮影する様子

研究会 協議から

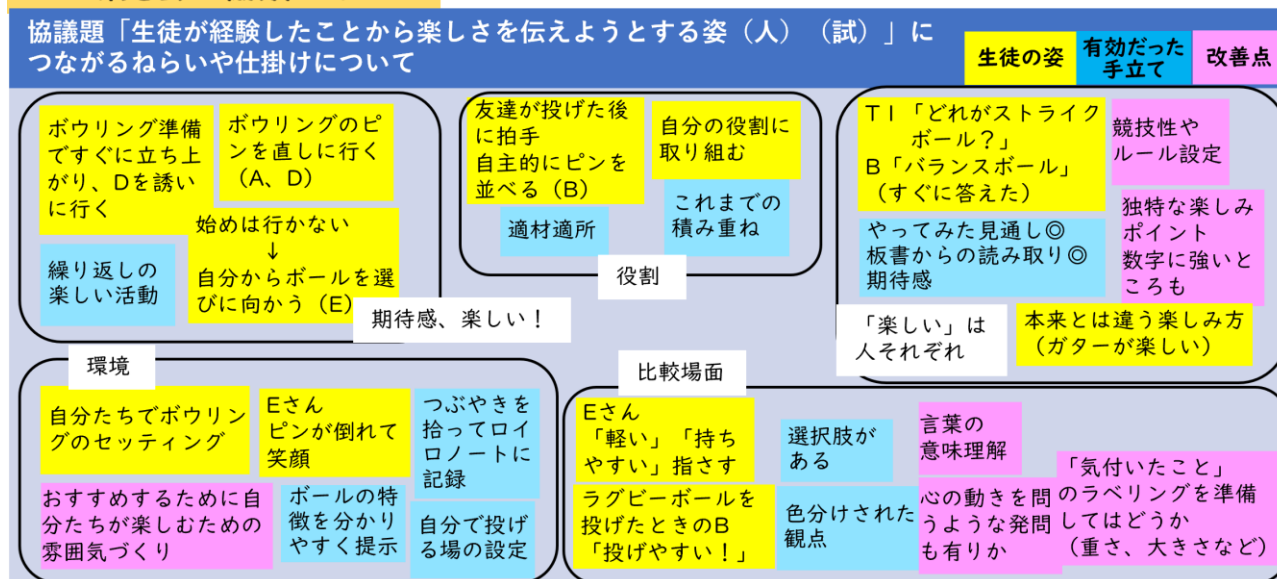


図5 全校授業研究会の協議記録

【講評より】

秋田大学教育文化学部 講師 能田 昂 先生	楽しさを伝えることが目的の授業だった。実際のスコアに加えて、楽しんだスコア（実際のスコアには比例しないもの）のようなものを導入しても面白いのではないかな。健康、運動、余暇などの視点から考えても、ボウリングという題材が良かった。 まだ慣れていない（関係が出来上がっていない）グループでの活動だった。「気持ちを伝えたい人がいる」「相手のことを想起させながらモチベーションを高めていく」ことが大切である。今回の学習を、他の公共施設や資源の利用、余暇活動等に般化させていけると良い。
秋田県立支援学校 天王みどり学園 教諭（兼）教育専門監 小野 直子 先生	「ルールや楽しみ方を知る」という目標は、小学部段階や中学部段階でも成立する。あえて高等部段階でこのようにねらいを設定した背景には、教師のいろいろな思いがあるのではないかな。学ぶ内容として、ボウリング場（遊戯場）の使い方、年齢層、療育手帳の扱いなど、広く捉えるのはどうか。 いろいろな人が楽しむのもいいが、ストライクを出すと画面が変わるなどの、現地ならではの楽しさや演出を授業に盛り込んでも面白いのではないかなと感じた。

（2）月グループ「災害×サバイバル～命を守るために～」（公開事前研～公開研）

①単元の概要

月グループでは、卒業後の生活を想像して「夢や希望」、「できるようにになりたいこと」、「心配なこと、不安なこと」について生徒同士で意見を出し合い、学びたい内容を考えた。授業ではロイロノートを活用し、生徒が個人のタブレット型端末から考えを入力したり、画像を添付したりするなどした。帰宅してからもロイロノート・スクールに入力することができるため、宿題や家庭での調べ学習にも活用した。

「どんな人でも楽しめるスポーツ」について学ぶ単元では、「体を動かしたい」という生徒の思いと、「楽

に痩せたい（たくさん体を動かすことは苦手）」という生徒の思いから、ニュースポーツについて調べたり体験したりする学習を重ねた。

「命を守る」方法について学ぶ単位では、「災害が発生した時にどのような行動をとればいいのか」「家族を守ることができるか」などの生徒の思いから、非常時を想定し、その場合の対応について考えたことを伝え合ったり、専門家から情報収集したりした。

②授業の概要

テレビ等で様々な災害の報道を見たり、一昨年の豪雨被害を目の当たりにしたりし、災害は生徒にとって関心のあるテーマの一つである。災害が起こったときにどうすれば自分の身を守ることができるか、家族の命を助けられるかということを考えた。専門家から教えてもらうために、秋田大学の能田昂先生から講義を受けたり、秋田市総合防災訓練に参加したりした。

起こり得る災害の種類は多く、非常用持ち出し袋を用意するために、必要なものを取捨選択する活動を繰り返した。「明かり、睡眠、情報、衛生面・けが・感染症、食べ物・水分、気候、ストレス、プライバシー」の項目について対処法を考えた。

③公開研究協議会より

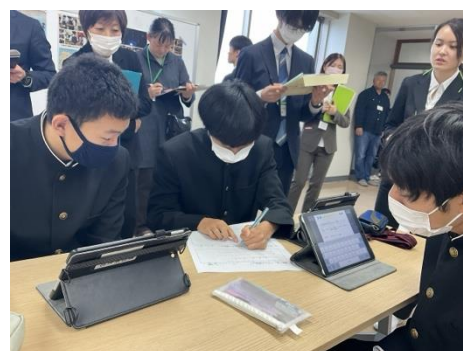
公開授業研究会では、清潔と健康をテーマに授業を提示した。前時までに学んだ骨折と出血の応急手当ての方法をグループごとに紹介するために、役割分担や説明の順番の相談をして取り組んだ。それぞれのグループの発表を見合い、感想や質問を伝え合った。

グループごとに非常用持ち出し袋に入れたら良いもの考えた後に、「自分だったら」という視点で考える時間を設けた。

授業後の研究協議会では、以下のような意見が出された（図6）。



大学で講義を受ける様子



グループで相談する様子

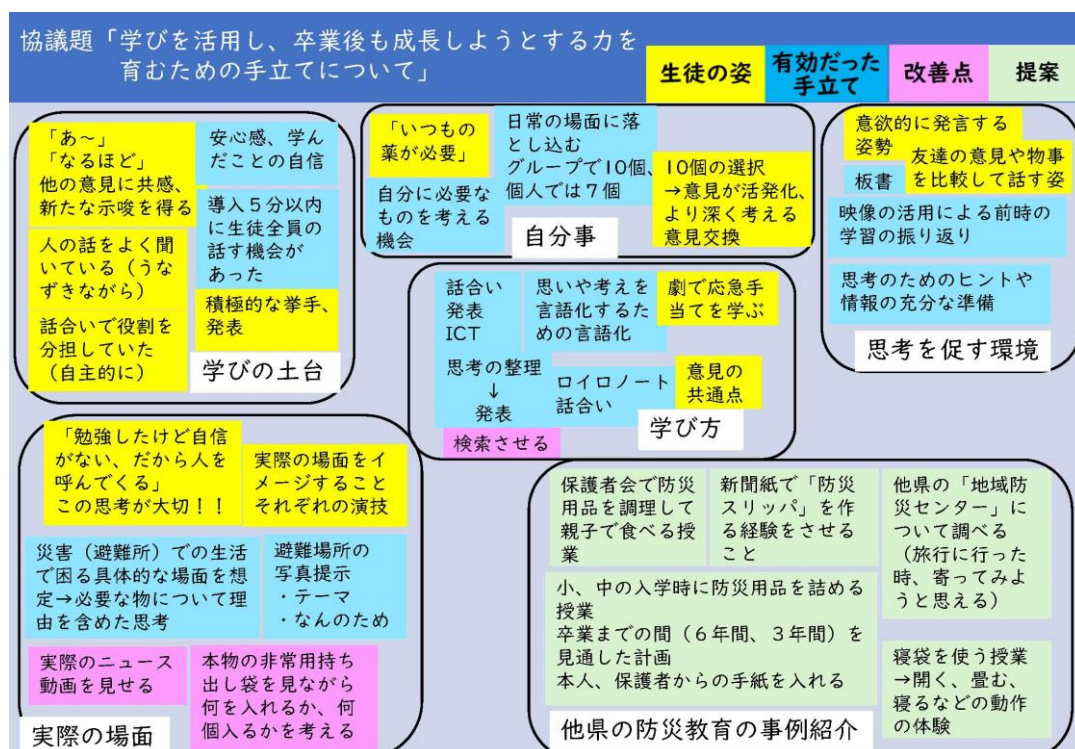


図6 公開研究協議会の協議記録

【講評から】

秋田大学教育文化学部 講師 能田 昂 先生	高等部の指導要領を見ると、「災害」の文言は少ない。今回のテーマは「清潔と健康」ということであつたが、非常時の健康には心の健康、メンタルヘルスを守ることにも含まれる。今回の学びを月グループのみの学びで終わらせるのではなく、附属特別支援学校の児童生徒、教員、保護者、学校と関係する人たちの文化としてどのように広げ、残していくことができるか考えてほしい。
秋田県立支援学校 天王みどり学園 教諭（兼）教育専門監 小野 直子 先生	月グループの人たちは、一人で留守番をしたり、卒業後は自力で出勤したりと、一人で過ごす時間が多い人たちだと思う。今回の学びを通して災害を自分事として捉えることで、実際に災害に遭った場合の行動が変わるはず。 対話を積み重ね、考えを伝え合うことで学びを深めてきた。今取り組んでいることが、卒業後に学んだり友達と過ごしたりする姿につながる。言葉のやり取り、言葉をたくさん扱うということを引き続き大切にしてほしい。

（３）秋田大学キャンパスツアー

①目的

昨年度から、秋田大学の授業や施設を高等部の生徒全員が見学するキャンパスツアーを実施している。在学中から大学を訪問し、施設や雰囲気を知っておくことで、卒業後の学びの場の選択肢になり得るのではないかと考え、企画された。

教育文化学部 に在籍する教員志望の大学生が企画、運営に携わっている。

②当日の活動より

当日は、秋田大学教育文化学部講師の能田昂先生から北欧の国に関する講義を受けた。昨年度は大学生が受けている講義の様子を参観するのみであつたが、30分ほどの講義を受けた。



講義を受ける様子



おしゃれグループの様子

次に大学生の生活を体験する目的で、おしゃれグループとサークルグループに分かれて活動をした。

おしゃれグループでは、大学生が毎日私服で登下校することから、服選びの理由やこだわりのポイントなどを紹介合った。その後、ヘアセットやネイル、メイクをしてもらう時間も設けられた。

サークルグループでは、二つのサークルを体験した。一つ目はよさこいサークル、二つ目はハンドボール部である。大学内の体育館を利用し、踊りを見学したりハンドボールを投げたりした。



サークルグループの様子

今回のキャンパスツアーでは昨年度の実施内容を踏まえて、実際に授業を体験したり体育館を利用したりするなど、秋田大学の施設利用の幅が広がった。生徒の振り返りからは「講義は難しかったけれど、また受けてみたい」「今回はおしゃれグループで体験したので、今度はサークル活動も体験してみたい」などの意見が挙がった。

4 まとめ

(1) 成果

①生徒の思い、願いを基にした授業

「Dスタディ」の学習を通して、生徒の興味、関心の広がりが感じられた。生活に結び付いた題材や活動だったため、休日や長期休業中に「こんなことをやってみた」と新たなことに挑戦する機会が増えている。家庭生活、地域生活での変容が見えにくい生徒もいるが、「Dスタディ」に限らず様々な授業で「自分でやってみようとする」「もっと知りたい」「学びたい」と、意欲的に取り組む姿が見られる。定期的に学習内容を高等部の廊下に掲示することで、生徒同士が互いの学習内容に興味をもったり話題にしたりと、学び合おうとする姿も見られた。

どの学習グループも、生徒の「やってみたい」「できるようになりたい」という思いを基に、単元計画を立てた。学習を進める中で、商業施設や専門家などの地域資源を効果的に活用した。授業で利用した商業施設に「休日出掛けてみたい」と話す生徒や、課題解決のために「専門家に聞けば教えてもらえる」と考える生徒など、関係した地域資源が、生徒の生活を豊かにする選択肢の一つとなったと考えられる。

②「私の応援計画（社会人用）」の試行

「私の応援計画（社会人用）」（図7）は年度途中で様式を決め、令和6年10月に本校の卒業生3名に記入してもらった。令和7年1月に、目標の達成度や、次年度の目標について進路指導主事との面談を通して考えた。今年度の目標を振り返った際に「この目標は高く設定しすぎたから」と、より具体的に実現可能な目標を考える姿が見られた。

卒業生との振り返りの中で「自分の欲しいものを買うために、新幹線の切符を買って他県に出掛けてきた」というエピソードがあった。この卒業生は在学中に「Dスタディ」の学習を通して、マップ機能の使い方や情報の集め方などを学んだ。

私の応援計画（社会人用）		名前
目指す姿	取り組むこと（支援してほしいこと）	評価
〈働き方〉 もっと役に立てるように働く。	1 農産物の仕事をしてみたい。(未経験馬具の仕事を教えてほしい)	自家の騎方をみまえた。所屬のクラブを信じての仕事は未経験
	2 畜産物の仕事	たいやき屋の仕事をしたい。
	3	
〈暮らし方〉 魚のさばきが上手になりたい。(一人料理)	1 母にアジやサバのさばき方を教えてもらう(やり方を教えてほしい)△	
	2 1人でアジをさばいてみる。アジは自分でさばいてみる。	
	3	
〈楽しみ方〉 電車以外にもいろいろなアスレシーにも入りたい。	1 山形、宮城、福島も電車で行ってみたい。	
	2	
	3	

3年間で目指す姿

卒業後1年目の目標を記入する

〈働き方〉について本人の振り返りと職場からの評価を記入する

評価を記入した後、次年度の取り組むことを考え、記入する

年度末までに評価を記入する

図7 私の応援計画（社会人用）評価後

③生徒との面談における「わかはとモデル」の活用

「私の応援計画」の面談で、面談シートを活用する機会を設けた。昨年度の研究では、生徒が答えたことや「私の応援計画」に記入した内容を教師が「わかはとモデル」の視点で見取っていた。今年度生徒との面談で「誰と協力したか（人と関わる）」「現場実習の作業内容は自分にとってどうだったか（自分を知る）」など面談シートを使いながら話題にすることで、教師と生徒が同じ視点で考えることができた。また、生徒が自身の変容を「わかはとモデル」の視点で振り返ることができたと感じる。

（２）課題と今後へ向けて

①エピソードシートの積み重ねと分析

エピソードシートの作成を進めたが、単元ごとに一人ずつ枠を設けて記録できるようにしたことによって一人一人の様子に注目できた一方で、記録する内容が絞りきれず、十分にエピソードを取り溜めることができなかった。記録する期間や内容、枠の形式など、さらに検討が必要であると感じた。

②卒業生の生涯学習力の検証

昨年度のアンケート内容を分析した他、卒業生との面談を通して「私の応援計画（社会人用）」を作成した。今年度は作成と運用の施行に留まり、「わかはとモデル」の視点で卒業生の現在の様子を見取るまでには至らなかった。

次年度からは、作成スケジュールを整え、計画的に面談する機会を設けたい。卒業生の勤務年数によって必要な支援の機会も異なると考えられるため、面談の時期や「私の応援計画（社会人用）」の記入の時期を計画的に設けていきたい。また、運用の中で「わかはとモデル」の視点で卒業生の姿を見取することで、卒業生の生涯学習力についても考察していきたい。

「わかはとシステム」による授業づくり



子どもの夢・願い (私の応援計画)	
家事のスキルを身に付けたい	友達と出かけたい (外食・キャンプ・旅行)
一人暮らしがしたい	体を動かしたい

教師が子どもに願う姿	保護者の思い
物事に興味をもち、主体的に行動しようとする姿	社会人としてのルールやマナーを身に付けてほしい
他者と協力して、問題解決する姿	いろいろな経験、体験をしてほしい
学習 (活動) に楽しさや充実感を感じている姿	規則正しい生活リズム、体力を付けてほしい

わかはとモデルの視点	
人 人とつながる 情 情報を集める 試 試す 好 好奇心 夢 夢中 自 自分を知る 興 興味・関心	人 友達と協力したり、他者に協力を依頼したりして課題解決しようとする。 試 調べて分かったことや、疑問に思ったことなどを実際に試して、理解を深めようとする。
情 得意な方法で情報を収集し、課題解決に生かそうとする。 興 興味や関心の幅を広げ、自分の生活に生かそうとする。	



生活単元学習(Dスタディ)	災害×サバイバル ～命を守るために～
生徒の関心が高い、災害時の生活や備えをテーマに学習を行う。実際に災害時の生活を想定した体験をしたり、非常持ち出し袋の準備をしたりする活動を通して分かったことや気付いたことをまとめ、他者に伝えたり、自分の生活に生かしたりする。	
【知・技】	災害についての基本的な知識や災害時の行動について知る。
【思・判・表】	災害時の行動、備えについて話し合ったり、自分に合った方法を考え発表したりする。
【学・人】	主体的に命を守るための行動について考えたり、友達と協力して活動に取り組んだりする。
関連する主な教科等 社会科、理科、国語科、保健体育科、職業科、家庭科	



つながりミーティングⅠ・Ⅱ	
人 大学の先生から災害について聞く、地域の防災フェアに参加する。 試 情報を活用し、実際に災害時の生活を体験する。	情 得意な方法で情報を集める。試して得られた気づきを整理する。 自 自分に合った災害時の行動や備えについて考える。
・地域や専門機関等の活用 (大学 生涯学習センター 秋田市総合防災訓練など) ・課題解決のプロセスを学ぶ ・個に返る学習活動にする ・学んだことを他者に伝える活動	

災害時の行動や生活について知ろう

指導計画と他教科等との関連

災害時の行動や生活について知ろう <ねらい> ・災害の種類や状況、災害時の生活について知る。（知・技） ・災害時の行動や生活について、調べた情報や体験したことをもとに、友達と話し合ったり、自分に合った方法を考え発表したりする。（思・判・表） ・災害をイメージして、自分事として防災について学んだり、体験しようとする。（学・人） <学習内容> 災害時の生活について調べたり、体験したりしながら、災害についての理解を深める。	【国語】 A 聞くこと・話すこと 【社会】 ア社会参加ときまり ウ我が国の国土の自然環境と国民生活 【理科】 B 地球・自然 【保健体育】 I 保健 【職業】 B 情報機器の活用 【家庭】 B 衣食住の生活
自分の非常用持ち出し袋を用意しよう <ねらい> ・非常持ち出し袋の必要性や基本的な中身、用途について知る。（知・技） ・これまでの学習や友達との話し合いをもとに考えた、マイ非常持ち出し袋について、自分の考えを交えて紹介する。（思・判・表） ・自分の意見を話したり、友達の考えを聞いたりしながら、非常持ち出し袋の中身を選択する。（学・人） <学習内容> 前単元までの学びを基に、災害への備えについて考える。非常持ち出し袋について学び、自分に必要な物が入った非常持ち出し袋を考える。	【国語】 A 聞くこと・話すこと 【社会】 ウ我が国の国土の自然環境と国民生活 【理科】 B 地球・自然 【保健体育】 I 保健 【職業】 B 情報機器の活用 【家庭】 B 衣食住の生活
災害への備えの大切さや災害時の行動について伝えよう <ねらい> ・分かりやすい情報の伝え方を知る。（知・技） ・災害時の備えや行動に関して学んだことを自分の考えや感想を交えながら表やポスターにまとめたり、工夫して紹介したりする。（思・判・表） ・友達と協力して災害に備えることの大切さや自分たちが感じたことを他者に伝えようとする。（学・人） <学習内容> これまでの学びを整理し、「防災フェア」としてワークショップを開催する。	【国語】 A 聞くこと・話すこと 【社会】 ウ我が国の国土の自然環境と国民生活 【理科】 B 地球・自然 【保健体育】 I 保健 【職業】 B 情報機器の活用 【家庭】 B 衣食住の生活

私の応援計画（社会人用）

名前			評価		
目指す姿			取り組みごと（支援してほしいこと）		
＜働き方＞ もっと役に立てるように働く。	1		農産の仕事をもっとおぼえる（未知野馬食の仕事を教えてほしい）○	自家のきちをよぼえた。	自家のきちをよぼえた。
	2		農物の仕事もしてみたい。やきしもの仕事もしたい。		
	3				
＜暮らし方＞ 魚のさばき、がよ手くなりたし（一人料理）	1		母にアジやサバのさばき方を教えてもらう（さばき方を教えてほしい）△	アジやサバはしてないが、アイは孝女だ。	アジやサバはしてないが、アイは孝女だ。
	2		のアイパプで魚をやってみる（それはまだいふていふをたいてみたい）		
	3				
＜楽しみ方＞ 電車以外にも、こういうアエリーも入で旅に出たい。	1		ひこうきのチケットを買う。（買い方をみる）△	電車のきっぷは一大いれればいぎで買った。	電車のきっぷは一大いれればいぎで買った。
	2		山形、宮城、福島も電車で旅行してみたい。		
	3				

第3章 アンケート調査の結果



アンケート調査の結果

1 障害福祉サービス事業所アンケートの結果

(1) 内容と方法

①対象

秋田市内障害福祉サービス事業所（70 箇所）管理者及びサービス管理責任者

②調査時期

令和 6 年 7 月～8 月

③調査方法

「生涯にわたる豊かな学び」に関する選択回答と自由記述によるアンケート調査

④調査内容・分析方法

障害者の卒業後の学びについて、どの程度「重要」と認識しているか、どの程度「機会の提供」を行っているか「重要である」「提供している」（5 点）、「やや重要である」「やや提供している」（4 点）、「どちらともいえない」（3 点）、「あまり重要でない」「あまり提供していない」（2 点）、「重要でない」「提供していない」（1 点）の選択肢により回答を求め、平均値を比較した。平均値の比較に当たっては、対応のある t 検定を用いた。検定ソフトは SPSSver. 29 を使用し、統計学的有意はいずれも p 値が.05 未満と定義した。また、自由記述による回答を KJ 法に準じて分析した。

(2) 結果

回答率は 41.4%であった。

①選択回答の結果

各調査項目の回答は、以下の通りである。

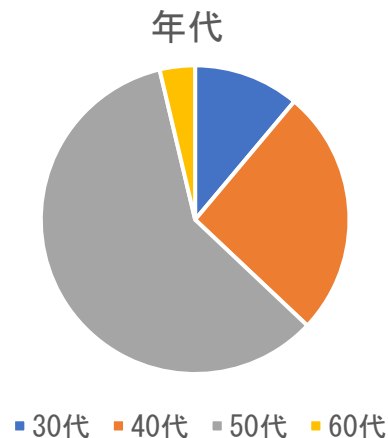
ア、性別



イ、年齢

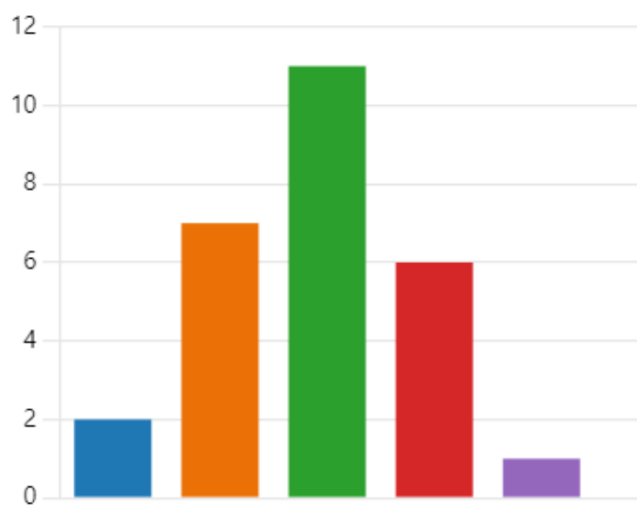
平均年齢 49.63 歳

30代	3名
40代	7名
50代	16名
60代	1名

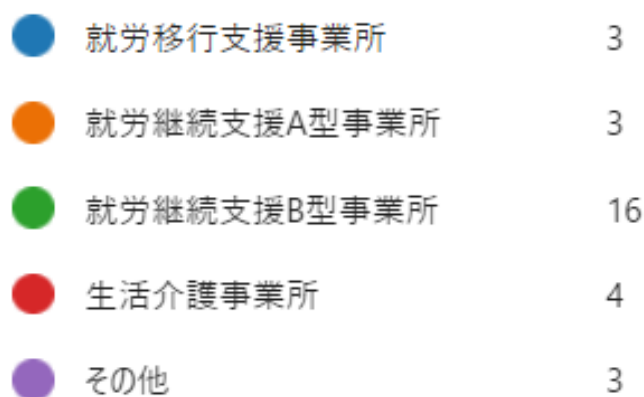


ウ、支援経験年数

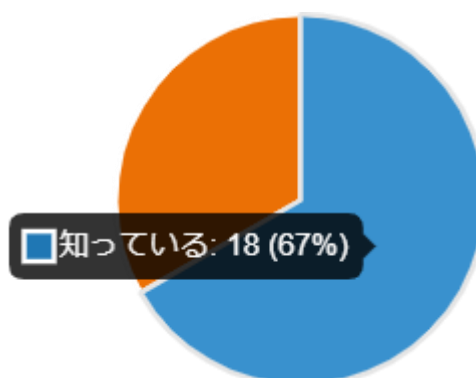
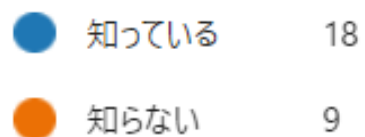
27 応答



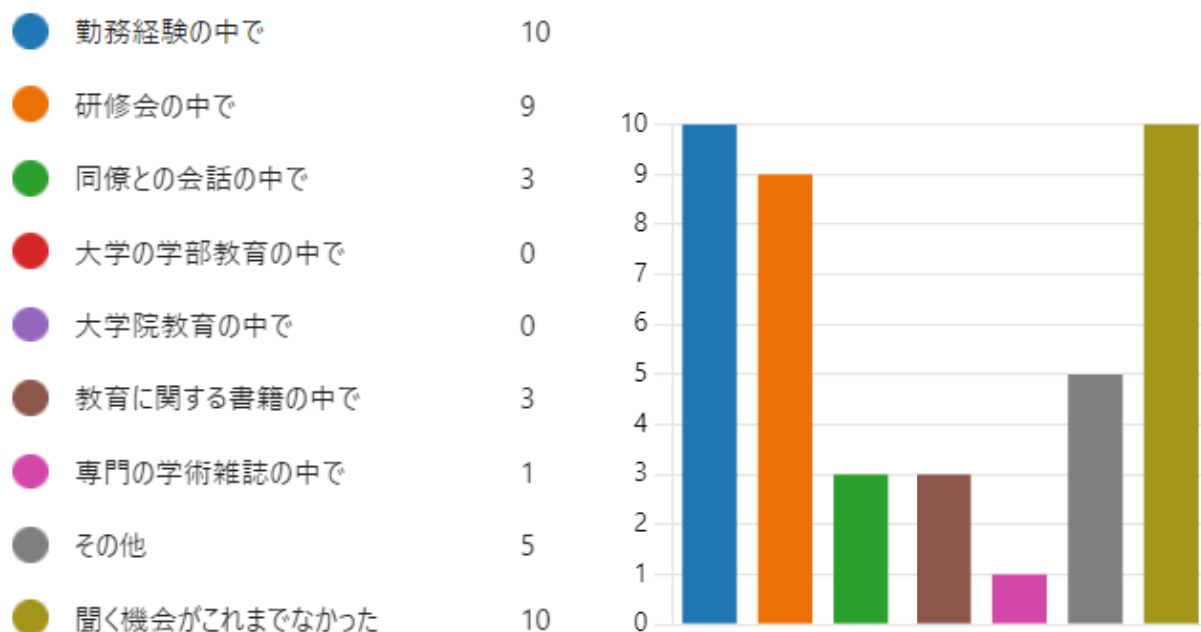
エ、事業所所属



オ、「障害者の生涯学習」について知っているか？

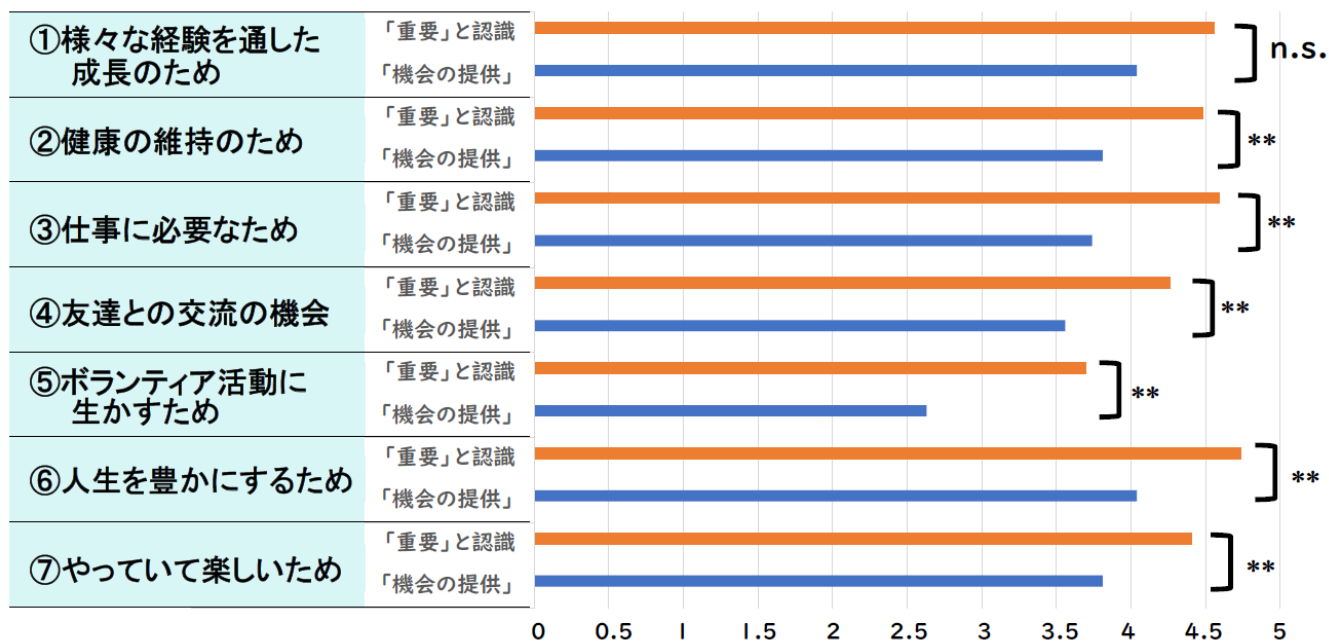


カ、どのような機会に「障害者の生涯学習」について聞くことがあったか？
（該当する項目、全てを選択）



キ、障害者の卒業後の学びについて、どの程度「重要」と認識しているか、どの程度「機会の提供」を行っているか？

* $p < .05$ ** $p < .01$



②自由記述の結果

自由記述による回答を KJ 法に準じて分析し、以下の表に示した。

表 1 「障害者の生涯学習」のイメージ（ n = 47 ）

推進のための必要な事項 (25)	支援体制の整備と情報の提供 (7)
	人との関わりや経験の積み重ね (7)
	個々に合わせた配慮や選択肢の設定 (5)
	楽しみながら学ぶこと (5)
	コミュニティの活用 (1)
生涯学習に対する認識 (16)	障害者の生涯学習の必要性 (5)
	豊かな生活を送るため (4)
	本人の成長 (4)
	余暇活動の充実 (2)
	重度の障害者には不向き (1)
具体的な内容 (6)	地域の中で過ごすための学習 (2)
	アート教室 (1)
	e-スポーツ (1)
	自然に触れ合う機会 (1)
	レクリエーションなどの共同活動 (1)

表 2 障害者の生涯学習を進める上での課題（ n = 45 ）

支援体制 ソフト面 (17)	職員の専門性の不足 (11)
	本人のニーズ (3)
	全職員の統一した支援 (2)
	個々の評価基準の曖昧さ (1)
支援体制 ハード面 (15)	作業中心の日課による時間的制約 (8)
	学びの機会の提供と継続 (5)
	資金と物の不足 (2)
利用者の課題 (13)	興味の幅の広さと集中力 (4)
	家庭環境 (3)
	コミュニケーション (3)
	重度障害者の生涯学習の在り方 (1)
	笑える生活を送ること (1)
	生涯学習への理解不足 (1)

表3 障害者が「生涯にわたって学び続ける」ために大切なこと（n = 49）

利用者自身の視点(23)	生きがいや周囲の人と楽しさの共有(7)
	学びの選択肢の拡大(4)
	社会生活スキルの向上(3)
	情報の活用(3)
	地域社会とのつながり(3)
	経済的安定と家族亡き後の問題(2)
	様々な大人や経験に触れる機会(1)
環境の整備(15)	興味関心を広げる環境づくりや機会の提供(8)
	人材の確保と育成(3)
	生涯学習の更なる普及(3)
	特別支援学校の専攻科や大学部の新設(1)
周囲の支援体制(11)	関係機関等の支援体制(5)
	本人の思いに寄り添うこと(4)
	支援基準の明確化(1)
	移動手段(1)

2 保護者アンケートの結果

（1）内容と方法

①対象

本校保護者 55 名（小学部：13 名，中学部：22 名，高等部：20 名）

②調査時期

令和 5 年 10 月～11 月

③調査方法

「生涯にわたる豊かな学び」に関する自由記述によるアンケート調査

④調査内容・分析方法

昨年度、家庭や地域での児童生徒の様子、要望などを知るために保護者に対してアンケート調査を実施した。昨年度の調査研究では、全回答をテキストマイニング分析ツール「ユーザーローカル AI テキストマイニング」により分析した（秋田大学附属特別支援学校研究紀要. 2024）。しかし、昨年度末に挙げられた課題では、生涯学習力を見取る 4 つの視点（「わかはとモデル」）が卒業後にどのように生かされ、広がっているのかを調査、分析、検証する必要があると指摘された。

そのため本調査研究では、本校保護者に対するアンケート調査の再分析を通して、「生涯学習力」を見取る視点として活用している「わかはとモデル」の有効性を検証するとともに、児童生徒が生涯にわたって学び続けるための資質・能力を検討することを目的とした。なお、保護者は障害のある児童生徒にとって学校段階はもとより、卒業後においても一番身近な理解者であり、重要な支援者の一人であるとする。分析に当たっては、以下の 2 つの質問内容にした。

質問 1 「生涯にわたって学び続けるために、特に大切だと考えること」

質問 2 「学校での学びが他の場面に生かされていること」

この 2 つの質問の自由記述による回答を KJ 法に準じて分析した。更に、小，中カテゴリーを基に「わかはとモデル」の視点を参考に分類、整理、比較した。

(2) 結果

回答率は87.3%であった。各質問の中カテゴリー化した分析結果を「わかはとモデル」の視点を参考に分類した(表4, 表5)。更に, 質問1, 質問2の中カテゴリーを「わかはとモデル」の視点を用いて整理, 比較したものを示した(表6)。

表4 生涯にわたって学び続けるために, 特に大切だと考えること (n = 84)

わかはとモデルの視点 (参考)	中カテゴリー	小カテゴリー
好奇心, 興味・関心, 夢中(26)	好奇心(11)	チャレンジ精神(6)
		好奇心(2)
		本人の意欲(2)
		受け入れる柔軟性(1)
	興味・関心(10)	興味・関心をもつこと(7)
		好きな人, 物事を見付け, 持ち続ける(2)
		余暇をもつこと(1)
	夢中(5)	達成感を得ること(2)
		楽しんで続けられること(1)
		集中力を高めること(1)
		経験から楽しさや感じる力を身に付けること(1)
人とつながる(22)	関わり(11)	人との関わりやつながり(9)
		社会とのつながり(1)
		事業所との連携(1)
	コミュニケーション(8)	コミュニケーション能力(3)
		意思や感謝の言葉の表出(3)
	挨拶(2)	
環境(21)	素直さ(3)	素直さ(3)
	周囲のサポート(10)	家族や周囲の理解と支援(8)
		支援機関(2)
	学ぶ環境(6)	学ぶきっかけ作り, 機会(4)
		学び続けられる環境(2)
	本人・家族の健康(4)	本人の健康(3)
		家族の健康(1)
試す(6)	賃金(1)	賃金(1)
	体験や行動(4)	体験すること(2)
自分を知る(5)	ADLの向上(2)	行動力(2)
		ADLの向上(2)
	内面の安定(4)	自己肯定感(2)
		できないと決めつけないこと(1)
情報を集める(4)	レジリエンス(1)	レジリエンス(1)
	自己理解(1)	自己理解(1)
情報を集める(4)	経験の般化(3)	楽しく学べること(2)
		学びを生かすこと(1)
	情報収集(1)	情報収集(1)

表5 学校での学びが他の場面に生かされていること (n = 66)

わかとはモデルの 視点 (参考)	中カテゴリー	小カテゴリー
試す(28)	家庭生活の充実(21)	食事スキルの向上と手伝い(10)
		掃除の手伝いや清掃技術の向上(4)
		学習や部活の準備(4)
		自発的な家の手伝い(2)
		更衣、排泄などの日常生活動作の向上(1)
	地域生活の充実(4)	公共機関や公共施設の利用(3)
人とつながる(23)	コミュニケーション能力 の向上(12)	電子マネーを活用した買い物の機会の増加(1)
		経験の拡大による活動の充実(2)
		運動の機会の設定(1)
	関わりの広がり(6)	挨拶の定着(6)
		会話でのやりとりの向上(5)
		言葉の理解の向上(1)
	マナーや態度の向上(5)	自発的な関わりの向上(4)
		周囲への発信の増加(1)
		人との関わり方の理解(1)
自分を知る(8)	見通し(3)	集団でのルールへの遵守(3)
		周囲への気配り(2)
		将来への見通し(2)
	内面の安定(3)	時間を意識した行動(1)
		経験の拡大による心の安定(2)
	自己理解の向上(2)	自己肯定感の向上(1)
情報を集める(5)	情報収集(3)	自己理解の深まり(1)
	経験の般化(2)	働く意欲の向上(1)
		情報収集(3)
好奇心、興味・関心、 夢中(2)	興味・関心(1)	確認動作の増加(1)
	好奇心(1)	やりたいことの計画(1)
		興味・関心(1)
		好奇心(1)

表6 質問1、質問2の中カテゴリーの抽出

わかとはモデルの 視点	質問1 特に大切だと考えること (n=84)	質問2 学校での学びが他の場面に生かされ ていること (n=66)
人とつながる	関わり(11) コミュニケーション(8) 素直さ(3)	関わりの広がり(6) コミュニケーション能力の向上(12) マナーや態度の向上(5)
情報を集める	経験の般化(3) 情報収集(1)	経験の般化(2) 情報収集(3)
試す	体験や行動(4) A D Lの向上(2)	地域生活の充実(4) 家庭生活の充実(21) その他(3)
自分を知る	内面の安定(4) 自己理解(1)	内面の安定(3) 自己理解の向上(2) 見通し(3)
好奇心、興味・関心、 夢中	好奇心(11) 興味・関心(10) 夢中(5)	好奇心(1) 興味・関心(1)
(新たな視点) 環境(21)	周囲のサポート(10) 学ぶ環境(6) 本人・家族の健康(4) 賃金(1)	

3 アンケート調査結果の考察

(1) 障害福祉サービス事業所アンケートの結果の考察

- ・障害者の卒業後の学びについて、「重要」と認識しているが、十分に「機会を提供」できていない状況が推察された。
- ・障害者の生涯学習について、支援体制の整備や情報の提供、人との関わりや経験の積み重ね等、推進のための必要な事項をイメージしていた。また、障害者の生涯学習の必要性や豊かな生活を送るため、本人の成長といった生涯学習に対する認識をイメージしていることが分かった。
- ・障害者の生涯学習を進める上での課題として、職員の専門性の不足など支援体制のソフト面についての課題や、作業中心の日課による時間的難しさといった、支援体制のハード面の課題があることが示唆された。更に、支援体制だけでなく、利用者自身の課題があることが分かった。
- ・生涯にわたって学び続けるためには、利用者自身の視点に合わせて、環境の整備や周囲の支援体制が大切であることが推察された。

(2) 保護者アンケートの結果の考察

- ・「わかはとモデル」は、教師間で協議し、作成したものであったため、有効なものであるか十分に検証できていない状況であったが、本調査結果から「生涯学習力」に関して、保護者が求めている資質・能力は、「わかはとモデル」の視点でほぼ網羅されていると考えた。また、学校での学びが家庭や他の場面で生かされているかとの質問の回答についても、概ね、「わかはとモデル」の視点で整理されたことから、当該モデルの有効性が示唆された。
- ・「自分を知る」では、保護者が特に大切と考えることと、学びが他の場面で生かされていることがほぼ同じ内容であった。保護者は生涯にわたって学び続けるために、内面の安定や自己理解を特に大切にしながら、それを児童生徒が他の場面で生かしている状況が推察された。「人とつながる」では、挨拶の定着やコミュニケーション能力の向上が生かされた。一方で、それ以上に保護者は、人との関わりやつながりを大切にしていることが分かり、コミュニケーション能力を土台としながらも、その力を活用することを望んでいることが推察された。さらに、「情報を集める」では、インターネットの活用などの情報収集が他の場面で生かされているという結果であったが、それ以上に保護者は経験の般化を特に大切にしていることが分かり、収集した情報を活用できるようになることを望んでいることが推察された。
- ・一方、調査結果から「わかはとモデル」の視点にはなかった「環境」という新たなカテゴリーが生成された。このことから、本人に対する教育のみならず、周囲のサポートや学ぶ環境、本人・家族の健康などといった環境整備にも注力していく必要性が示唆された。さらに、「好奇心、興味・関心、夢中」では、保護者は好奇心、興味・関心、夢中を特に大切に考えているものの、他の場面に生かしているとの回答が少なかったことから、好奇心、興味・関心、夢中を更に広げることができる環境づくりが求められると考えた。
- ・保護者に対するアンケート調査の分析では、「生涯学習力」を見取る視点として活用している「わかはとモデル」の有効性を検証したが、今後は児童生徒が生涯にわたって学び続けるための資質・能力を身に付けたかという、児童生徒本人の変容や検証、卒業後の進路先である事業所等のアンケート調査等、多面的な検証の機会が必要であると考ええる。

第4章 研究のまとめ



研究のまとめ

1 成果と今後に向けて

今年度の研究実践を通して、以下の成果と課題、今後に向けての方策が挙げられた。

(1) 成果(○)と課題(△)

①児童生徒の夢や願いを基点とした授業づくり

- 【小学部】 ○児童の夢や願い、思いの膨らみにつながる振り返り活動の充実
△児童の興味・関心が広がるような、幅広い単元設定の検討
- 【中学部】 ○面談の充実、APDCAサイクルの各取組における教師の方向性の共有
△単元(授業)の振り返りとしての面談の実施
- 【高等部】 ○地域資源を活用することによる生徒の興味、関心の広がり
△卒業後の学びの姿との関連

②「わかはとモデル」を活用した児童生徒の見取り

- 【小学部】 ○児童の内面に迫ることによる、授業で身に付けたい資質・能力の焦点化
△見取った思いを児童と共有するためのツール(思いいっぱいシート)の工夫、改善
- 【中学部】 ○生涯学習力の高まりを指導計画に反映した授業づくり
△「育成を目指す資質能力」と「生涯学習力」との関連の整理
- 【高等部】 ○「わかはとモデル」の視点を活用した生徒との面談の充実
△エピソードシートの蓄積と検証

③生涯にわたる豊かな学びを目指した授業づくりに向けて

「わかはとシステム」の活用と改善

【わかはとシステム運営委員会の設置】

- 「わかはとシステム運営委員会」を設置することで、各学部、各分掌との連携を図りながら「わかはとシステム」の活用に向けた各種教育計画と本校の教育課程について、検討を進めることができた。また、教務部が中心として進めている「つながりミーティング」では、児童生徒の見取りの背景や他の場面で生かされている点に加えて、「わかはとモデル」の視点を使い、「生涯学習力」の高まりについて検討し合うことができた。

△研究での成果を教育課程の編成につなげるためには、これまでの研究を通して築いてきた本校の教育課程の見直しを図っていくことが課題として挙げられた。今後は、本委員会の在り方を整理し、次年度以降も機能する役割をもたせる必要があることが推察された。

【エピソードシートの活用】

- 児童生徒の日々の様子や変容について、各学部の実情に応じてロイロノートを活用し、エピソード記録を取りためることができた。また、そのエピソードの解釈を学部の職員で見取り、分析することができた。
- △学部によっては対象生徒のみの記録に留まっていたことから、今後は更に多くの児童生徒を対象とした検証と、見取った内容の活用の仕方を検討していきたい。

「私の応援計画」の「ブラッシュアップ」

【「私の応援計画」作成ガイド(改訂版)の作成】

- 「私の応援計画」作成ガイドの改訂版の作成に向けて、「わかはとシステム運営委員会」で協議を重ね、今年度末に完成することができた。
- △この作成ガイドの改訂版を活用して、今後5年、10年と時が流れ、本校の職員が大きく変わった際にも本人主体の「私の応援計画」の理念や手順を継承していきたい。

【キャリア・パスポートとしての利用】

- 「私の応援計画」作成ガイドの改訂版の作成作業に合わせて、キャリア・パスポートとしてファイル化(「学びの道標」)を全校統一で行うことができた。
- △「私の応援計画」をキャリア・パスポートとして更に活用していくために、児童生徒本人による評

働や学びの履歴の活用方法について、実践を積み重ね、児童生徒の変容について分析や検証を行っていきたい。

【「私の応援計画（社会人用）」の検討】

○卒業生3名を事例対象として、「私の応援計画」の社会人用を試行することができた。事例対象の1名の事業所では、「本人の内面を知ることができてよかった」「今後、仕事を覚えた段階で、業務内容を検討し、本人のキャリアアップにつなげたい」と前向きな話が聞かれた。

△次年度以降も継続してこの実践を積み重ねるとともに、在校生とのつながりの検討や、事例対象の卒業生自身の心の変化や変容についても検証していきたい。

「生涯にわたる豊かな学び」の検証（アンケート調査の分析と検証）

【障害福祉サービス事業所へのアンケート調査】

- ・障害者の卒業後の学びについて、「重要」と認識しているが、十分に「機会を提供」できていない状況が推察された。
- ・「障害者の生涯学習を進める上での課題」として、職員の専門性の不足など支援体制のソフト面についての課題や、作業中心の日課による時間的難しさといった、支援体制のハード面の課題が挙げられた。
- ・「生涯にわたって学び続けるために」、利用者自身の課題や環境の整備、周囲の支援体制が大切であることが推察された。

【在校生の保護者へのアンケート調査】

- ・保護者が求めている資質・能力は、「わかはとモデル」の視点でほぼ網羅されていた。また、学びが活かされている内容も当該モデルの視点と重なることから、「わかはとモデル」の有効性が示唆された。
- ・一方で、「わかはとモデル」にはない「環境」という新たな視点が生成され、本人への教育のみならず、学ぶ環境や周囲のサポート等といった環境の整備にも力を注いでいく必要があることが示唆された（図1）。

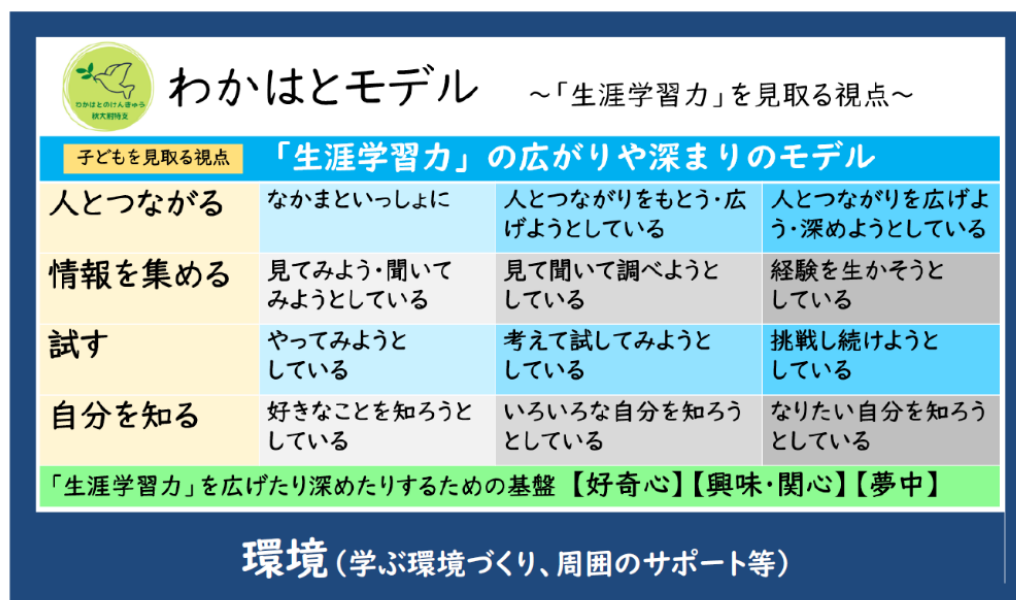


図1 わかはとモデル（新）

(2) 今後に向けて

①「生涯にわたって学び続ける資質・能力の育成」の継続と発展

平成 31 年公示特別支援学校高等部学習指導要領には、「生徒が学校教育を通じて身に付けた知識及び技能を活用し、もてる能力を最大限伸ばすことができるよう、生涯学習への意欲を高めるとともに、社会教育その他様々な学習機会に関する情報の提供に努めること」と示されている。また、令和 6 年 12 月中央教育審議会から示された「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」（諮問）の冒頭では、「人生 100 年時代」の到来や労働市場の流動性の高まり、マルチステージの人生モデルへの転換により、生涯にわたって主体的に学び続け、自らの人生を舵取りする力を身に付けることの重要性が増している」と示されている。これは、本校で長年にわたり取り組んできた「生涯学習力」の育成に重なる部分である。2 年間の研究を通して、生涯にわたる豊かな学びとは何か？を検討し、そして、生涯にわたる豊かな学びを目指した授業づくりに取り組んできた。その答えは、これまで本校が大切にしてきた本人主体の「私の応援計画」が重要な鍵を握り、今後も更に探究していく必要があると考える。

②保護者、地域社会、大学との連携による生涯にわたって学び続ける環境の整備

アンケート調査の分析を通して、「わかはとモデル」の有効性ととともに、周囲のサポートや学ぶ環境などといった環境の整備の必要性が挙げられた。学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議報告（2019）によると、「一緒に学習する友人、仲間がいない」「学ぼうとする障害者に対する社会の理解がない」などが、障害者本人が感じる生涯学習の主な課題として挙げられ、「知りたいことを学ぶための場や学習プログラムが身近にある」とした回答は 3 分の 1 以下に留まっていた。今後は、保護者、地域社会、大学との連携を更に図りながら、生涯にわたって学び続けるための環境の整備を進める必要があると考える。

③学びの履歴の活用と卒業後へのつながり

児童生徒の夢や願いを基点としながら研究を進めたことで、本校の教育の中心にある「私の応援計画」はキャリア・パスポートとして活用していくことが期待できることが示唆された。現行学習指導要領の前文には、「児童生徒が、『生涯にわたる学習とのつながりを見通す』ためにもキャリア・パスポートは大切なものである」と示されている。本研究を通して、「私の応援計画」を綴ったファイルを「学びの道標」として全校統一で準備することができた。しかし、本校でキャリア・パスポートとして学部を越えて学びの履歴として活用している実践は多くはない。今後は、「私の応援計画（社会人用）」の実践を積み重ねるとともに、学部間を越えた学びの履歴の活用方法や、事例対象としている卒業生自身の心の変化や変容についても検証していきたい。

④生涯にわたって学び続ける資質・能力の育成に向けた教育課程の編成

本校では、令和元年度から「主体的にヒト・モノ・コトに関わり生涯にわたって学びに向かい成長しようとする力」を「生涯学習力」と定義し、生涯にわたって学び続ける資質・能力の育成に取り組んできた。今年度は、更に「わかはとシステム運営委員会」を設置し、児童生徒の夢や願いを基点とし、子どもと授業をつなげ、「生涯学習力」の育成を目指すための仕組みづくりについて検討を進めてきた。しかし、研究での成果を教育課程の編成につなげるためには、これまでの研究を通して築いてきた本校の教育課程の見直しを図っていくことが課題として挙げられた。今後は、本委員会の在り方を整理するとともに、本校の教育資料との関連を確認し、更新していく必要がある。そのことで、社会に開かれた教育課程の実現を一層進めることができると考える。



「夏のセミナー」

生涯学習ブース

12:30～13:50

シンポジウム

14:00～15:30

—— 秋田大学附属特別支援学校 ——

生涯にわたって学び続けていくために必要な学校や家庭、地域の在り方について学び合ったり、その資源（大学、社会教育施設、福祉施設など）を幅広く知ったりできる機会です。
どなたでも気軽に参加できます。

日時 8月21日（水）12:30～15:30

会場 秋田大学 60周年記念ホール 他

申込はこちら



同日開催

✓ 就労アセスメント研修（AM）
対象：福祉関係者

<https://forms.office.com/r/ap4KEfx9v>

シンポジウムの記録（グラフィックレコーディング※）

表紙	シンポジウム 登壇者
No. 1	卒業生 A さんの話題提供
No. 2	卒業生 B さんの話題提供
No. 3	卒業生の話の感想、卒業生アンケート結果
No. 4	相談支援から見る「豊かな学び」とは？
No. 5	行政から見た「豊かな学び」とは？
No. 6	藤井先生（秋田大学 教授）からの総括
No. 7	あなたが考える「豊かな学び」とは？

※グラフィックレコーディングとは、ホワイトボードや紙に、会議や議論などの内容をデザインとして可視化し、整理していく手法です。

シンポジウム 夢や願いの実現に向けた「生涯にわたる豊かな学び」とは？

令和6年度 夏のセミナー シンポジウム

8/21(水)14:00-15:30
◎秋田大学手形ホール

テーマ 夢や願いの実現に向けた「生涯にわたる豊かな学び」とは？

→ 知の応援計画 → 生涯学習

シンポジスト

 Aさん Aさん母 卒業生 音楽・水泳 B型事業所勤務	 Bさん 卒業生 めぐるのに苦労！ スマホ勤務	 Cさん 高等部3年 ヲカ部 強にチム！	 Dさん 高等部3年 けん玉が泳 夢に夢中！ 生徒会
 Eさん 竹生寮 生徒員 シトシニハハッ！	 Fさん 秋田県特別支援教育課 女科省も経験 子の野球応援と、バスケのめり	 Gさん 秋田大学大館校 教員 本校の校報編集	 Hさん 秋田大学 教員 るる自転車みかきが趣味 コーディネーター

主催 / 秋田大学教育処・学部附属高特別支援学校

1. 卒業生の話題提供①

NO.1

- 在学中の思い出
 - 元気ラン4づくり
- 今働いているところ
 - おいぼりたたき
- 大変なこと
 - 人との関わり方
- 気をつけること
 - 職員の話をよく聞く
- 家庭で気をつけていること (保護者)
 - がんばりを認める
 - くり返しコトバがけ
 - 「職員さんに話をするように」とアドバイス
- 応援計画をよりめえろと...
 - 職員に注意されたことは△
- 楽しみなこと
 - イラストすること
 - 将来やってみたいこと
 - 家族を旅行に招待したい

2. 卒業生の話題提供②

NO.2

● 在学中の思い出



技能競技大会

● 今、働いているところ



フロア清掃
モチベーション!

お客様の声かけも

● 仕事でむずかしいところ



お客様をよく見て気持ちよく

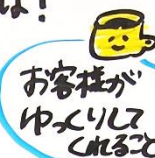


感謝を伝える

● 仕事のやりがいとは?



お客様からの「ありがとう」



お客様が
ゆくりして
くれると

● 休日の過ごし方は?



マウンテンバイク

● お店によるちがいは?



景色がいい店



本屋がある店

● 応援計画を ふりかえり...



仕事を一定の
スピードで!

臨機
応変に
対応する!

● 将来やってみたいこと



1人でドリンク
作れるように
なりたい

「ブラック
エフェル」

に4人シフト
したい

10人
1人

3. 卒業生の話の感想

2人くらい過ごさせている



いい意味で 変わらないこと
が大事なかも!

キャリアアップしよう!



という意欲が
うれしい

仕事のプライドが
2人の自信に
なっている



4. 卒業生アンケート結果

NO.3

● 卒業後の学びは?

水泳
スポーツ観戦!

● 続ける理由は?

「やっていると楽しいから」

● こんな場所があればいいな

交流
参加
機会

保護者
アシスト

学び続けるために大切なことは?

環境づくり
サポート

興味関心

人との関わり

健康

4人シフト精神

シンポジウム「夢や願いの実現に向けた高等部卒業後の豊かな学びとは？」

5. 相談支援から見る「豊かな学び」とは? by 竹生 彦彦 秋田県立大学

秋田には、支援者もたくさん!

ウェルビーイング、クローバー、ほくと、ふきのとう、竹生彦彦

ぜひ支援サービスを活用してほしい!

相談会にもぜひ参加を!

秋田は生涯学習に力を入れている!

生涯学習 余暇活動

どっちも! ライバルを充実させるための活動!

省庁より呼び方が変わる!

所得 生活 日中活動 余暇活動

相談支援 人

地域生活を送るための要素のひとつ

ex.) ハイキング 馬のり

6. 行政から見た「豊かな学び」とは? by 県 特別支援教育課 阿部 翔太

① 特別支援 総合計画

生涯学習 が位置づけられている!

協議会 セカンド ステップ

② 障害者学習支援 推進室

新設

学習プログラム 実証

ex.) 県が「卒業後の学び支援」に力を入れている

学校卒業後における障害者の学びの支援推進事業

課題

情報発信 側 受けとめ 側

「居場所」としての活動がとても大切

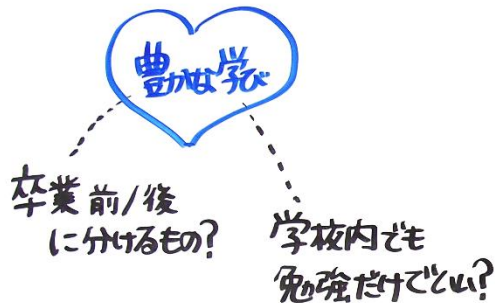
福祉との連携が必要!

おわりに

連携 本人主体 在学中にたのしい仲間をみつける

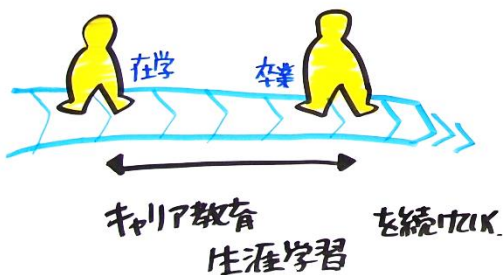
7. 藤井先生からの総括

No.6



well-being

を実現するには



すべてが支援の資源に!



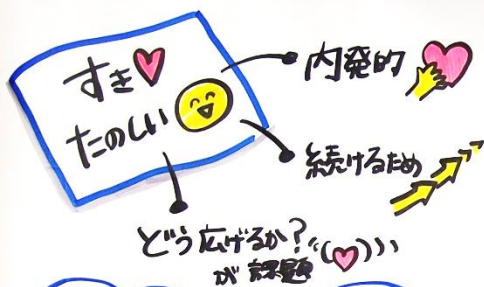
学生時代に必要なこと



自己好きな絵を描いて進めよう!

8. あなたが考える「豊かな学び」とは? by グループワーク

No.7



卒業生はオン/オフを切り分けて過ごしている!

秋田のリソース減

支援受ける側から支援する側になる事例は?

講座参加者が支援側になることも!

高齢者の事例もある!

シンポジストの感想

来年度社会人に...卒業生のよさにイニシアチブを認識したい!

卒業後の様子知れて良かった!

子どもと一緒にいろんなことにチャレンジしたいと思った!

時代に合せて職場環境が変えていくのが楽しみ!

「相談支援専門員」ぜひ知って、活用してほしい!!

生涯学習支援側もその自身が生涯学習になっている!

卒業生には光り輝いてほしい!

相互に学び合おう!!



公開研究協議会（講演）の記録

秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 公開研究協議会（二次案内）

研究主題
生涯にわたる豊かな学びを
目指した授業づくり
～児童生徒の夢や願いを基点とした
『わかばシステム』の活用～

**生涯にわたる
豊かな学び
とは？**

参加費 無料
参加型
誰でも参加可能

11月2日(土) 9:10～15:50 会場：本校

本校では、「生涯学習力」の育成を目指し、児童生徒、授業ファーストの研究に取り組んでいます。今年度（2年次）は、「私の応用計画（個別的教育支援計画）」と「生涯学習力」の育成をつなげる『わかばシステム』の活用を進めています。※主体的にヒト・モノ・コトに関わり生涯にわたって学びに向かい成長しようとする力、と定義しています。

日程

8:40	9:10	10:00	10:15	10:40	10:50	12:10	13:00	13:50	14:05	15:25	15:50
受付	公開授業	移動	開会式・説明	移動	分科会Ⅰ（授業研究会）	昼食・休憩	分科会Ⅱ（情報交換会）	休憩	講演	閉会式・行事	

公開授業および授業研究会

小学部 生活単元学習 わかば学校（3、4年生）
「スイーツわかば～しょうかくふのともだちとパーティー～」
授業者 今野文雄 堀根楓
研究協力者 鈴木徹（秋田大学教育文化学部 准教授）
進藤拓歩（総合教育センター 指導主事）

中学部 生活単元学習（2年生）
「開店！！炎のワークスペース」
授業者 松尾佑美 武藤海斗 藤原佑介
研究協力者 藤井慶博（秋田大学大学院 教授）
島津志司（総合教育センター 主任指導主事）

高等部 生活単元学習（ロスタディ）月グループ（1～3年生合同）
「災害×サバイバル～命を守るために～」
授業者 加藤秀幸 石成舞
研究協力者 能田昂（秋田大学教育文化学部 講師）
小野直子（天王みどり学園 教育専門監）

講演「特別支援学校における生涯にわたる豊かな学びを目指して」

【専門分野】
社会教育論、生涯学習論、インクルージョン論、
障害のある人に関わる学習実践論・学習支援論、福祉教育・ボランティア学習論

【著書】
・『生涯学習のインクルージョン―知的障害者がもたらす豊かな学び』明石書店、2023年4月
・『物語としての発達／文化を介した教育』生活書院、2012年10月
・『知的障害のある成人の学習支援論』学文社、2006年12月

講師：津田英二 教授
神戸大学大学院
人間発達環境学研究科

分科会Ⅰ（授業研究会）
児童生徒の様々な姿から
授業改善のヒントを探ります！
「小学部」
「中学部」
「高等部」

分科会Ⅱ（情報交換会）
お好きなテーマの
分科会に参加します！
「生涯学習」
「キャリア・パスポート」
「社会とのつながり」

参加までのステップ

- 2次元コードから申込み
WEBフォームにてお申し込みください（締切10/23）。
- 事前連絡（10/25頃）
資料をダウンロードできるパスワードをお伝えします。
- 当日参加
当日、どうぞお気を付けて本校へお越しください。

交通案内

●バス
秋田駅西口バスターミナルから
中央交通バス
神田旭野線 8番線乗り場 約15分
添川線 8番線乗り場 約15分
⇒「保戸野八丁」バス停下車：徒歩3分

●タクシー
秋田駅西口から 約10分
秋田空港から 約40分

※秋田大学の学生は、担当教員を通して参加申し込み願います。

参加申込みは、下記のQRコードやURLからお願いします！

 <https://forms.office.com/r/VjiC4KZwBn>
fuyo@sh.akita-u.ac.jp

学校名 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校
住所 秋田県秋田市保戸野原の町7-75
電話番号 018-862-8583
問合せ 教頭 近江龍静 研究主任 池田和馬

講演の記録（グラフィックレコーディング）

No. 1～4・・・ 講演

講演「特別支援学校における生涯にわたる豊かな学びを目指して」
神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 教授 津田 英二 様

秋田大学教育文化学部 附属特別支援学校 公開研究協議会

講演

特別支援学校における
**“生涯”にわたる
豊かな学び**を目指して

講師

神戸大学大学院
人間発達環境学研究科
津田 英二 教授

2024.11.2(土) 14:05-15:25

実践紹介 NO.1

のびやかスノーアール

神戸大学が
譲り受けてスタート
六甲おちに建つ 元区役所
住民と学生・教員の
手作り施設

課題は**お金**どなるか？

障害のある人が
自然に来るとは
ほとんどない...

保護者「バス乗らせたくない」
公共の場での
他人の視線がツライ

ある常連の
親子
からの動機は！
**受け入れられ
ている
と思える**

地域の人々
がボランティアで
折り紙などプログラム実行
によるあち

学び

□ 通常の場合は □ 排除されると □ 人と出来事が
けこう排他的... 心のバリア強くなる... 成長うなびす！

実践紹介 NO.2

カフェ「アゴラ」

神戸大学6F
コーヒー好きな
吉田さんが
初代マスター

1人分しか雇用
資金ない...

再チャレンジ助成金で
知的障害のある方を
雇用！

その後 大学が
資金を出してくれるように。

気づき

「ありがとう」と言われたことが
成長のきっかけに！

実践紹介 NO.2

KUPI (学ぶ楽しさ発見プログラム)

「学校教育法」の中で通常
入試アリ！ (10名)

学ぶ気もち
ある人

非障害者学生と知的障害学生が学び合う

社会教育 課題研究

動画制作など **表現活動**を共同でつくる。

学び

□ 知的障害のある
学生の学ぶ意欲が
スゴイ！

□ 違いを強調するのではなく...
同世代の青年たちの
共通性から学びがある

一般学生が
反教になる

手を
新入生

インテリゲン
ティブな
学びを他教員も
面白がっている！

講演「特別支援学校における生涯にわたる豊かな学びを目指して」
神戸大学大学院 人間発達環境学研究科 教授 津田 英二 様

実践紹介 障害者の生涯学習 兵庫 コンソーシアム

アシストより実情が浮き彫りに...

自由時間に活動したい！

活動できてない...

生涯学習 ネットワーク

平日、退所後などで困ってる...

自宅と作業所だけの世界...

同世代との交わりがない...

世の中の理解がなにも出て来ない...

情報が入ってこない...

情報発信アプリ

ミュージアム・イン・ア・スクール プロジェクト

博物館調査

学び

No.3

人口減少地域の課題が生涯学習推進の課題になる

神戸大学附属特別支援学校で学んだこと

ここは教育の原理を考えた場所！

社会の仕組みを感じる...

...だからこそ大事な場所

わかばモデルについて

学校の外に飛び出すイメージを持てるといい！

わたしの応援計画がその基礎体力となる。

けんちゃんの話

自閉症の男の子

あちで出た。

ぼくも大学生になる！
と言いつけた

30代

社会の人との関わりの中で「こうなりたい」の思いが育まれている

わかばモデルから夢がうまれることもあるのでは!?

家族

学校

社会

授業

友達

わかばモデル

どんな関わり？

わたしの応援計画

どこでどれと連携？

会場から

No.4

なじめない場

親近な関係

学校はともかくとあると見るとも違う！
そこを乗り越えていこう！
そこを乗り越えていこう！

くじけても帰って来られる「中間」の場を作りたい。

Q 社会とのつながりどう作っていく？

A 思いつくところに支援の糸がある！
（社協）（親）（地域の人）
親戚や近所、親戚を中心とした「大集会」でみんなとつながりたい。

【引用・参考文献】

- (1) 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「ひと・地域・未来をつなぐ」研究紀要第41・42・43集, 2015・2016・2017
- (2) 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「本人主体の個別的教育支援計画（私の応援計画）を活用した教育課程の編成」研究紀要第44・45集, 2018・2019
- (3) 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「児童生徒の『生涯学習力』を高める教育課程の編成」研究紀要第46・47集, 2020・2021
- (4) 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「新しい時代で学び続ける児童生徒を育てる～学びの積み重ねの実践とゆるやかなネットワークの構築～」研究紀要第48集, 2022
- (5) 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「新しい時代で学び続ける児童生徒を育てる～『生涯学習力』を高める授業づくりを通して～」研究紀要第49集, 2023
- (6) 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校 「生涯にわたる豊かな学びを目指した授業づくり～児童生徒の夢や願いを基点とした『わかはとシステム』の構築」～研究紀要第50集, 2024
- (7) 菊地一文 (2021) 「知的障害教育における学びをつなぐキャリアデザイン-本人の思いや願いを踏まえた深い学びの実現に向けて-」ジアース教育新社
- (8) 文部科学省 (1981) 「生涯教育について（答申）」中央教育審議会
- (9) 文部科学省 (2010) 「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」
- (10) 文部科学省 (2010) 「特別支援教育の在り方に関する特別委員会 論点整理」
- (11) 文部科学省 (2012) 「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」
- (12) 文部科学省 (2012) 「障がいのある学生の修学支援に関する検討会報告（第一次まとめ）」
- (13) 文部科学省 (2016) 「教育課程企画特別部会 論点整理」
- (14) 文部科学省 (2016) 「個別の指導計画」と「個別的教育支援計画」について
- (15) 文部科学省 (2017) 「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編（小学部・中学部）」
- (16) 文部科学省 (2017) 「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）」
- (17) 文部科学省 (2017) 「特別支援学校学習指導要領解説 総則編（幼稚部・小学部・中学部）」
- (18) 文部科学省 (2017) 「特別支援学校幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領」
- (19) 文部科学省 (2018) 「学校卒業後における障害者の学びの推進方策について（論点整理）」
- (20) 文部科学省 (2018) 「障害者の生涯を通じた多様な学習活動の充実について」
- (21) 文部科学省 (2018) 「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策（最終まとめ）」
- (22) 文部科学省 (2018) 「第3期教育振興基本計画」
- (23) 文部科学省 (2019) 「障害者活躍推進プラン～障害のある人の力を生かして未来を切り開くために必要な5つの政策プラン～」
- (24) 文部科学省 (2019) 「障害者の生涯学習の推進方策について―誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して―（報告）」
- (25) 文部科学省 (2020) 「特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料」
- (26) 文部科学省 (2021) 「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」中央教育審議会
- (27) 文部科学省 (2024) 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」中央教育審議会
- (28) 高橋基裕 藤井慶博 (2020) 「当事者主体の個別的教育支援計画の実践とその効果に関する研究」発達障害研究：日本発達障害学会機関誌 / 日本発達障害学会 編 41(4)
- (29) 津田英二 (2023) 「生涯学習のインクルージョン -知的障害者がもたらす豊かな学び-」明石書店

あ と が き

振り返ってみると、本校の「生涯学習」に焦点を当てた研究は「私の応援計画（個別の教育支援計画）」から始まり、今年度で8年目となります。子どもたちの夢や目標をモチベーションにして生涯学習力を高めるための授業や教育課程はどうあればよいかを追求してきました。そして今年度の研究テーマ「生涯にわたる豊かな学びを目指した授業づくり」のまとめの年へとつながっています。

生涯学習という言葉に触れたのは、自分が教育専門監をしていた頃に本校の公開研究会の助言者として依頼された時と記憶しています。初めはスケールの大きい話だなと思いました。学校を卒業してからの時間が何倍も長いから、卒業後のアプローチや研究成果の検証等が必要なのではないか、学校教育でそれを行うのは現在在籍している子どもたちの研究とかけ離れてしまうのではないかと単純に考えてしまいました。しかし、本研究の考えや経緯等に触れていくにつれ、そうではではないことに気付きました。

突然ですが、我が息子は本校の卒業生です。いつもいろんなことに興味をもって、自分で調べたり、分からないことがあればすぐに家族や作業所の職員さんに尋ねています。それが日常なので当たり前のことと思っていましたが、よくよく考えてみると、これはすごいことなのかもしれないと気付きました。学校時代にiPadで調べる方法を学び、分からないことがあったら人に尋ねるというコミュニケーションを学び、何よりも、いろんなことに興味・関心をもつことができる大らかさを育んでもらったからこそ今ののだろうと思っています。ちなみに我が子はいつも楽しそうに生活しています。

卒業してからも豊かな生活を送ることができるように、今、授業や子どもとの関わりを通してどんな力を育んでいけばよいのかを考えていきたいと思っています。学校の研究は子どもたちを真ん中に置いた子どもたちのための実践研究であるべきです。子どもとの対話を大事にしながら、豊かな将来を見据えた取組を続けていこうと思います。

副校長 宮 野 俊 実

研 究 同 人 （令和 6 年度）

校長	前原 和明	教諭	今野 文龍
副校長	宮野 俊実	教諭	佐藤 美里
教頭	近江 龍静	教諭	信田 智華子
主幹教諭	菊地 雄平	教諭	樋渡 実由梨
教諭	小川 順子	教諭	越後 楓
教諭	鈴木 暢子	教諭	菅原 活
教諭	本多 勝成	教諭	武田 茜
教諭	下村 光行	教諭	保達 美智
教諭	高橋 浩樹	教諭	田中 智佳
教諭	池田 和馬	教諭	佐々木 蓮
教諭	菊池 高之	教諭	鈴木 明日香
教諭	山田 賢子	養護教諭	佐藤 麻衣子
教諭	藤原 佑介	教育系スタッフ	吉田 みぎわ
教諭	石成 舞	教育系スタッフ	星川 翔矢
教諭	加藤 秀幸	教育系スタッフ	武藤 海斗
教諭	五十嵐 俊輔		
教諭	松尾 佑美		

研究協力者（秋田大学）

藤 井 慶 博
 鈴 木 徹
 能 田 昂

秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 第47号別冊
 附属特別支援学校・令和 6 年度研究紀要 第51集

印刷・発行 令和 7 年 3 月
 発 行 秋田大学教育文化学部附属特別支援学校
 〒010-0904 秋田市保戸野原の町7-75
 TEL 018-862-8583
 FAX 018-862-8525
 HP <http://www.sh.akita-u.ac.jp>
 Mail fuyo@sh.akita-u.ac.jp
